

釘崎 1 号古墳・丸山古墳

福岡県八女市大字豊福・本所在古墳の確認調査報告書

八女市文化財調査報告書 第 69 集



釘崎 1・2 号古墳より八女市内を望む（北東より）

2 0 0 3

八女市教育委員会



釘崎1号古墳全景（西より）



丸山古墳全景（西より）



丸山古墳 2 番トレンチ須恵器群出土状況（西より）



丸山古墳 2 番トレンチ須恵器群出土状況（北より）

序

現在、八女市の北部丘陵を中心とした周辺地域には数多くの古墳が所在し、その総数は300基以上と言われています。その中には岩戸山古墳をはじめとした12基の前方後円墳も含まれており、県下有数の大古墳群とし「八女古墳群」の名称で一部が国指定史跡となっています。

しかし、当然これら古墳の全てが指定史跡になっている訳ではなく、そのほとんどが未指定のまま現状で保存されているのが実状です。

近年、市内の各種開発は中心域の商業地だけではなく、北東部の丘陵地にまで押し寄せて来ております。厳しい昨今の状況の中、このまま貴重な遺跡を現状で保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、重要な遺跡の範囲等を確認する調査を、ここ数年來行って来ております。

今回、範囲確認調査を実施した釘崎1号古墳と丸山古墳は既知の古墳でしたが、長年の風雨等にさらされる中、一部に損傷の兆しが発生している事が判明し、将来の史跡指定又は史跡整備を鑑み、必要最小限の発掘調査を行いました。詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、予想を上回る成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該古墳、そして八女古墳群を含めた郷土の文化財に対する愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた多くの地権者の方々をはじめ、地元町内会や住民の皆様には並々ならぬご理解と心からの応援を戴きました。深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、国・県の補助を受けて実施した重要遺跡確認調査「釘崎1号古墳」（八女市字豊福）、及び、史跡内容確認調査「丸山古墳」（八女市大字本）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。又、発掘現場における調査は12・13年度に行い、整理作業及び報告書作成については平成14年度に一括して行った。
- 3 墳丘の測量は、仮主軸線を任意で設定した後、仮線に対し直角・斜角線上に基準杭を設定し、平板測量及びトレンチ設定の基準とした。
- 4 本書に使用した測量図の作成は、大塚を中心に参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は、空中写真を（有）空中写真企画に委託した。墳丘・遺構については現地で大塚が行い、出土遺物の撮影においては筑後市教育委員会の協力を仰ぎながら大塚が行った。
- 6 本書使用の方位については、全て磁北である。
- 7 本書の執筆・編集は大塚が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	1
1	調査に至る経過	1
2	調査体制	2
II	遺跡の立地と歴史的環境	4
III	調査の内容	8
1	釘崎1号古墳	8
1)	トレンチの調査	8
2)	出土遺物	11
2	丸山古墳	18
1)	トレンチの調査	18
2)	出土遺物	26
IV	小結	38

図版 (P L A T E S)

挿 図 目 次

- 第 1 図 八女古墳群と周辺の主要古墳 [1/50,000]
- 第 2 図 釘崎1号古墳周辺地形測量図 [1/300]
- 第 3 図 釘崎1号古墳墳丘測量図 [1/300]
- 第 4 図 1番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第 5 図 1番トレンチ東壁土層実測図 [1/60]
- 第 6 図 2番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]
- 第 7 図 2番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第 8 図 3番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第 9 図 3番トレンチb-c土層実測図 [1/60]
- 第10 図 3番トレンチg-a土層実測図 [1/60]
- 第11 図 3番トレンチa-b土層実測図 [1/60]
- 第12 図 4番トレンチ南壁土層実測図 [1/60]
- 第13 図 4番・5番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第14 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第15 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第16 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第17 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/6・1/3]
- 第18 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第19 図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/3]

丸山古墳

- 第20 図 1番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第21 図 1番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]
- 第22 図 丸山古墳墳丘測量実測図 [1/300]
- 第23 図 2番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第24 図 2番トレンチ くびれ部須恵器群出土状況実測図 [1/20]
- 第25 図 2番トレンチ くびれ部葺石平面実測図 [1/40]
- 第26 図 2番トレンチ東壁土層実測図 [1/60]
- 第27 図 2番トレンチ拡張部A-B土層実測図 [1/60]
- 第28 図 2番トレンチ拡張部B-C土層実測図 [1/60]
- 第29 図 3番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第30 図 3番トレンチ拡張部b東壁土層実測図 [1/60]
- 第31 図 4番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第32 図 4番トレンチ東壁土層実測図 [1/60]
- 第33 図 5番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第34 図 5番トレンチ葺石検出状況 [1/30]
- 第35 図 5番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]
- 第36 図 6番トレンチ平面実測図 [1/60]
- 第37 図 7番トレンチ平面実測図 [1/60]

- 第38図 7番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]
- 第39図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第40図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/4]
- 第41図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/4]
- 第42図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第43図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第44図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第45図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第46図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第47図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]
- 第48図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第49図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]
- 第50図 釘崎1号古墳 推定復原図 [1/300]

図 版 目 次

- PL 1～PL 7 釘崎1号古墳 現地調査状況
- PL 8～PL 15 丸山古墳 現地調査状況
- PL 16 釘崎1号古墳 出土遺物
- PL 16～PL 17 丸山古墳 出土遺物

I 調査の経過

1 調査に至る経過

釘崎1号古墳

八女市の中・北東部に位置する豊福一帯は、全長85mの鶴見山古墳をはじめ、八女古墳群中で最も前方後円墳の密集度が高い地域として、かねてから注目を集めていた。総数5基を数える前方後円墳の内、これまでに鶴見山古墳(註1)、釘崎2号古墳(註2)、釘崎3号古墳(註3)の調査が行われているが、残念ながら、釘崎3号古墳は昭和45年(1970年)の削平工事の際、十分な調査が行われないうちに消滅してしまっている。又、前二者の古墳についても保存に主眼を置いた最小限度の調査であった為、本地域のこれら古墳群の詳細については、現状では未だ不明な点が山積みしていると言わざるを得ない。

この様な状況の中、これまで人の手がほとんど入る事の無かった釘崎1号古墳に調査のきっかけが発生したのは、平成12年6月に行われた古墳時代政治構造研究会(代表:奈良女子大学教授 広瀬和雄)における古墳群見学の折、同古墳西側斜面部分が新規に削平されている事が判明し、同行していた八女市職員がこれを確認した事による。

八女市教育委員会では、ただちに今後の対応について協議。地権者に対し、今後これ以上の開削を中止していただき、削平部分を含めた範囲内容確認の発掘調査を要請。地権者からは快諾の返答を得た。同時に福岡県教育委員会に対し、12年度に予定し、国庫補助事業採択が内定していた丸山古墳の史跡内容確認調査を取り止め、急遽、同調査事業を釘崎1号古墳の内容確認事業費として充てられるよう、文化庁あて協議していただくよう要請した。後日、文化庁より許可が出された旨を県教育委員会経由で連絡をいただき、平成12年12月より、墳丘の測量調査、及び、散乱した埴輪片の採集作業を開始した。

丸山古墳

八女市の北東部に位置する立山地区周辺には数多くの古墳群が存在し、八女古墳群の形成・盛衰を知る上で重要な古墳も内在している。中でも本古墳群(註4)に所在する本6号墳(真浄寺2号墳)などは短甲2領を副葬した5世紀後半頃の古式古墳で、古代史上最大の内戦と言われる「磐井の乱」発生直前の軍事色の濃い古墳として、その存在意義は大きい。

丸山古墳が存在する立山山古墳群は、前述の本古墳群より東方約500mに位置しており、1981年(昭和56年)の発掘調査では、金製垂飾付耳飾(8号墳)などの豪華な副葬品が出土しており、朝鮮半島南部地域との深い関係が先学により指摘されている。

丸山古墳は、広川丘陵から南に派生した舌状を成す緩斜面突端に位置し、その標高は古墳群中最下所にあるものの、墳形や立地状況から、同古墳群の盟主墳とみられている。

このような学術的重要性が考慮され、昭和53年に八女古墳群の1つとして国指定史跡となった同古墳であるが、長年の風雨には抗し切れず、近年の間に墳丘の一部損傷が目立つようになってきた。

この事態を踏まえ、八女市教育委員会では将来の簡易修復、そして整備計画策定の前段階として丸山古墳・史跡内容確認調査を平成12年度の国庫補助事業として採択されるよう申請を行った。しかし、前述した釘崎1号古墳の調査が緊急案件として急浮上した為に断念。改めて翌13年度事業として申請を行い、後日無事採択され、平成14年2月より墳丘測量から事業を開始した。

事業の実施にあたり、福岡県教育委員会より学識経験者による発掘調査指導委員会を組織するよう助言を受け、これに基づき八女市教育委員会では丸山古墳発掘調査指導委員会を立ち上げ、調査に際し万全を期す事とした。

本指導委員会は、第1回委員会を平成14年2月18日に開催し、トレンチの設定位置や調査終了後の保

護措置についてご指導を賜わり、又、平成14年3月20日に開催の第2回委員会では調査結果の中間報告を行った後、現地視察を行い、今後の修復・復元についてご指導を賜わった。

2 調査体制

〔調査指導〕

丸山古墳発掘調査指導委員会

委 員 佐田 茂 (佐賀大学教授)
霧久 嗣郎 (八女市文化財専門委員)
橋口 達也 (福岡県教育委員会文化財保護課参事)

〔調査主体〕

八女市教育委員会

【平成12年度】 (釘崎1号古墳発掘調査)

教育長 樋口 欽一
教育部長 石松 憲治
生涯学習課長 諸富 和生
同 補佐 志岐 徳
文化財係長 赤崎 敏男
同 係員 中川寿賀子
同 係員 大塚 恵治 (調査担当)
同 嘱託 山田 朗子 (調査担当)

【平成13年度】 (丸山古墳発掘調査)

教育長 樋口 欽一
生涯学習課長 諸富 和生
同 参事 川島 敏雄
同課長補佐 佐野 正義
同参事補佐 鹿野 耕一
文化財係長 赤崎 敏男
同 係員 中川寿賀子
同 係員 大塚 恵治 (調査担当)
同 嘱託 山田 朗子
同 嘱託 小杉山大輔 (平成13年11月から14年3月まで)

【平成14年度】 (発掘調査報告書作成)

教育長 中島 清志
生涯学習課長 諸富 和生
同 参事 今村 求
同課長補佐 鹿野 耕一
同参事補佐 佐野 正義
文化財係長 赤崎 敏男
同 係員 中川寿賀子
同 係員 大塚 恵治 (整理担当)

同	嘱託	安武 寛文（平成14年6月から）
同	臨時	藤川 広美（平成14年4月から同年12月まで）
同	臨時	池田 仁美（平成15年1月から）

なお、発掘調査にあたり、釘崎1号古墳の地権者である野上 登様、山田輝男様をはじめとし、一念寺住職 丸山宏龍様には作業用の駐車場を提供していただき、又、東部土地改良区の関係各位、豊福・立山地区の地元町内の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。調査にあたり、皆様のご声援は我々の大変な励みとなりました。末筆ながら、感謝の意を表します。

また、以下の方々には並々ならぬ御指導、御教示、御協力を受けました。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略）

西谷 正（九州大学名誉教授）、佐々木隆彦、伊崎俊秋、岸本 圭（福岡県教育委員会）、吉留秀敏、菅波正人（福岡市教育委員会）、小田和利（九州歴史資料館）、小川泰樹（南筑後教育事務所）、石井扶美子（夜須町教育委員会）、池ノ上宏（津屋崎町教育委員会）、坂井義哉（大牟田市教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、永田寧（立花町教育委員会）、永見秀徳、小林勇作、上村英士、柴田剛、立石真二（筑後市教育委員会）、江口寿高（筑後考古学研究会）、古墳時代政治構造研究会諸氏、埋蔵文化財研究会福岡県担当職員諸氏

（註1）赤崎敏男 1986「鶴見山古墳」八女市文化財調査報告書第14集

（註2）赤崎敏男・中川寿賀子 1992「釘崎古墳群」八女市文化財調査報告書第24集

（註3）八女市史（上巻） 第2編「原始」

（註4）同註3



釘崎1号古墳 損壊発見時の状況（南より）

II 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部地区に所在し、西に筑後市、東に上陽町・黒木町、北に広川町、南に立花町・瀬高町と、一市五町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳繩山地南緩斜面より西に延びる八女台地（八女丘陵）と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字形に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

釘崎1号古墳、及び、丸山古墳は八女市の中・北東部に位置しており、共に台地上にあるが、扇状地である平野部との境付近の頂部や突端部に築かれている為、そこからの眺望は素晴らしく、眼下には広々とした田園風景が広がり、西南の遠方には有明の海が見え隠れしている。

交通事情の観点から見ると、八女市内には国道442号線が東西に走り、近年ではその交通需要の増大に伴い、国道442号線バイパスの建設が急ピッチで進められている。又、九州地方の大動脈である九州縦貫自動車道や国道3号線が市内を南北に貫くなど、八女地方の交通の要衝となっている。特に縦貫道においては、既存の八女インターチェンジのみならず現在では広川インターチェンジも開通しており、八女地方の交通需要は今後ますます増加してゆくものと予想される。

【歴史的環境】

釘崎1号古墳は八女市大字豊福字釘崎山、丸山古墳は八女市大字本字蓮池に所在している前方後円墳である。両古墳とも中小規模の大きさしかないものの、総数300基以上と言われる八女古墳群において、前方後円形を採り得た意味は大きいと思われる。以下、八女古墳群について略記する。

八女古墳群とは、西は三斎町所在の十連寺古墳から東は八女市に所在する童男山古墳までの総延長十数kmに及ぶ八女台地（以下、八女丘陵とする）上に存在する古墳群の総称である。

現在、群中には消滅分も含めて12基の前方後円墳が知られている。これらはかつて西から東に向かい順次築造されたものと考えられていたが、近年の発掘調査や資料整理の中で、若干様相が異なっている事が知られるようになった。

八女古墳群形成初段階の古墳は広川町・筑後市所在の石人山古墳（墳丘長108m）がある。初期横穴式石室内部に妻入の家形石棺を持ち、屋根外面及び妻側には直弧文が浮き彫りされている。石室形態や出土した初期須恵器から、築造時期は5世紀前半～中頃に比定されている。後円部と前方部の境には武装石人が立像しており、筑紫君磐井の祖父とも言われている。

続く5世紀後半代には、石人山に後続する大型の前方後円墳は八女古墳群中には見られず、空白の時期となる。周辺地域に目を転じると、この時期に築造された大型の前方後円墳に久留米市の石櫃山古墳・浦山古墳があり、両古墳とも横穴式石室内部に横口式家形石棺を持ち、肥後南部地域を介し、石人山古墳との密接な関係が存在する事は以前から先学により指摘されている。当該時期、八女古墳群内では筑後市所在の瑞王寺古墳（直径26m 円墳）・欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）が知られていたが、近年埴輪研究の進展に伴い八女市の釘崎2号古墳がこの時期に該当する事が判明した。この2号古墳の南東約800mには立山山窟跡群があり、隣接した2基の埴輪焼成窯が発掘されている。1号窟跡の埴輪は岩戸山古墳に供給されており、2号窟跡の製品は、その形態の類似性から釘崎2号古墳に供給されたと指摘されている。2号古墳と岩戸山古墳の関連も考えられよう。

6世紀前半～中頃には、八女古墳群に大型の前方後円墳が再び出現する。西から岩戸山古墳（前半）、乗場古墳（中頃）、善蔵塚古墳（中頃）の3基があるが、いずれも墳丘長が70mを超えるものである。岩戸山古墳は、墳丘長135mを測る北部九州最大の前方後円墳で、『石人・石馬』の名で知られている阿蘇溶結凝灰岩製の石製表飾品を多数出土している事でも有名である。平成9年度に行われた電気探査では、後円



1. 浦山古墳 (前) 2. 石櫃山古墳 (前) 3. 藤山甲塚古墳 (前)
 4. 本山古墳 (前) 5. 欠塚古墳 (前) 6. 石人山古墳 (前)
 7. 弘化谷古墳 (円) 8. 神奈無田古墳 (前) 9. 岩戸山4号古墳 (円)
 10. 岩戸山古墳 (前) 11. 乗場古墳 (前) 12. 善蔵塚古墳 (前)
 13. 丸山塚古墳 (円) 14. 茶臼塚古墳 (円) 15. 釘崎3号古墳 (前)
 16. 釘崎4号古墳 (前) 17. 釘崎2号古墳 (前) 18. 釘崎1号古墳 (前)
 19. 丸山古墳 (前) [(前)・・・前方後円墳 (円)・・・円墳]

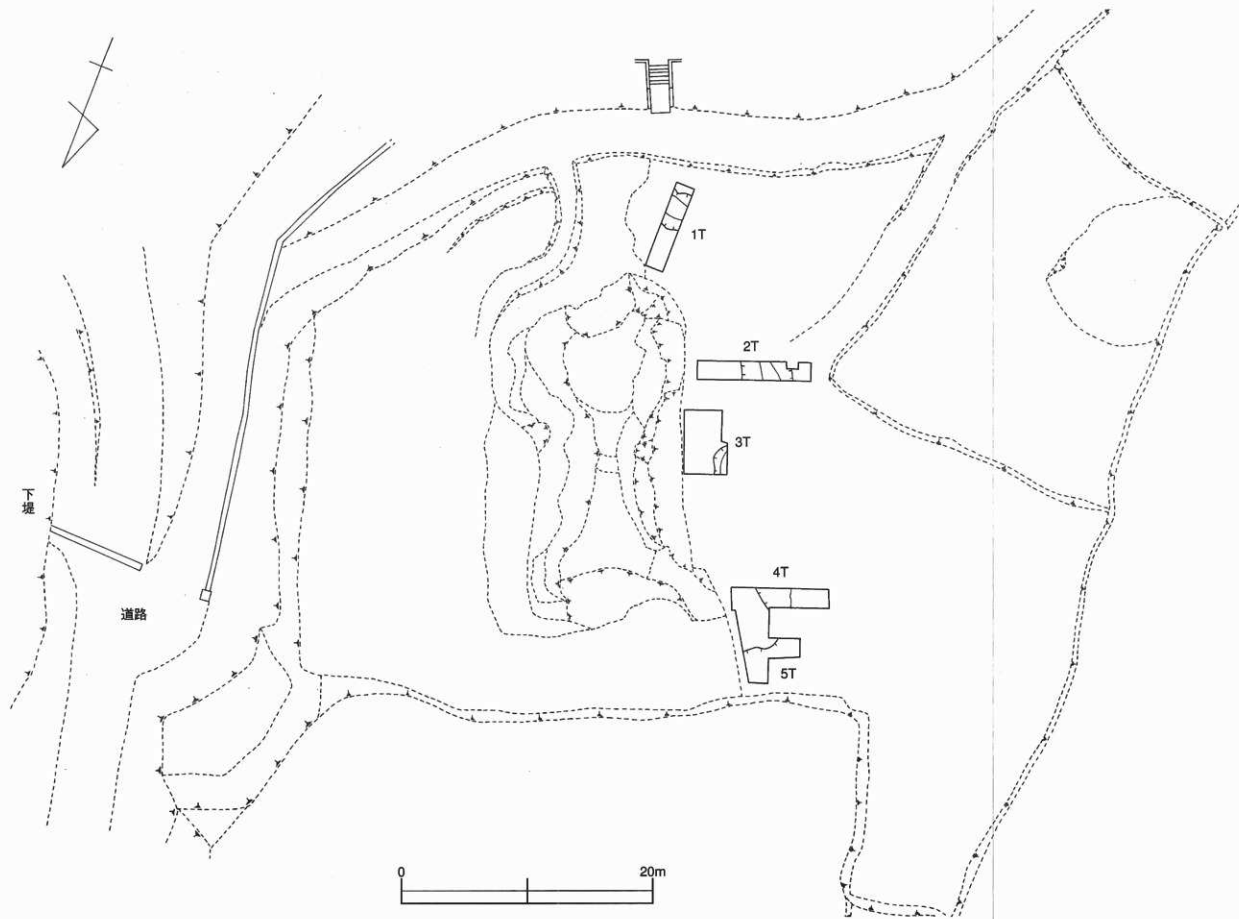
第 1 図 八女古墳群と周辺の主要古墳 [1/50,000]

部中央付近から南西くびれ部に向かう地下構造物が確認されており、石室存在の可能性が指摘されている。乗場古墳は、墳丘長7.2mを測る前方後円墳で、昭和30年頃までは周溝や周堤も存在していたらしいが、その後周辺の宅地化等により墳丘以外は失われている。久留米藩の学者 矢野一貞の指摘から、江戸時代には墳丘上に石人が樹立していたものと思われる。内部主体は南南西に開口する複室の横穴式石室で、内部には幾何学文や形象図文が彩色されている。善蔵塚古墳は広川町と八女市の境に所在し、墳丘長9.0mを測る前方後円墳で、八女古墳群中において第3番目の規模を誇る。

後者の2古墳の在り方は、岩戸山古墳の被葬者である筑紫君磐井が西暦527年に起こした「磐井の乱」後の状況を記した記紀や、筑後国風土記逸文に記載された内容に若干の疑問を投げかけるものである。

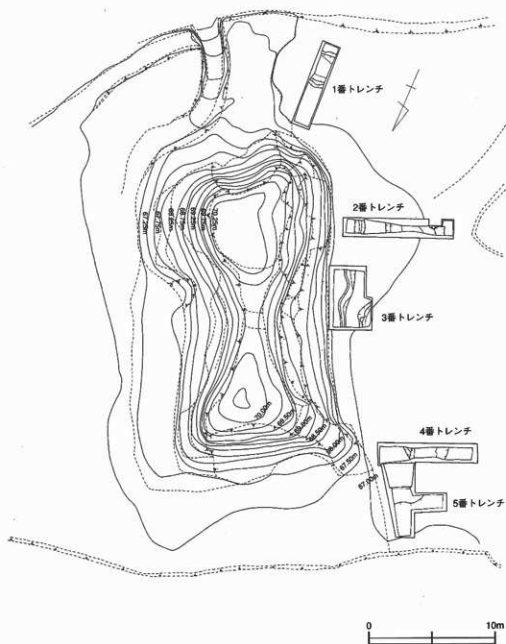
6世紀後半頃には、八女丘陵上の古墳が爆発的にその数を増してゆく。前述した善蔵塚古墳周辺には茶臼塚古墳や丸山塚古墳などの直径3.0m程の円墳が出現し、壁画系装飾古墳も含まれる。釘崎古墳群の所在する豊福地区には、墳丘長8.5mを測り八女古墳群中第4番目の規模を誇る前方後円墳の鶴見山古墳をはじめ、3.0m級の前方後円墳が重層的に存在する。

6世紀末～7世紀初頭にかけは、八女古墳群の東端に所在する童男山古墳（直径4.8m）や岩戸山古墳西側に位置する岩戸山4号古墳（下茶屋古墳 直径3.0m）などの大型の石室を内部主体に持つ円墳が分布するが、これらの古墳を最後に、八女古墳群は終焉を迎える。



第 2 図 釘崎1号古墳周辺地形測量図 [1/300]

※図中の「T」はトレンチを示す。



第 3 図 釘崎 1 号古墳墳丘測量図 [1/300]

Ⅲ 調査の内容

1 釘崎1号古墳

今回は、古墳の規模に関する基礎的データを最小範囲の掘削で得る事を目的とした為、トレンチの掘削については調査の発端となった古墳西側の地権者との間のみで協議し、古墳東側の別地権者との間では、墳丘の測量作業に際し地域内への立ち入りと基準杭の設定についてのみ許可を載いた。

調査は、墳丘測量と同時並行して古墳の遺存状況、及び、規模の把握の為、前方部に2カ所、くびれ部に1カ所、後円部に2カ所の計5カ所にトレンチを設定して実施した。各トレンチは墳丘測量の過程で設定した仮主軸線（縦軸）に対し、それに直交する横軸を後円部で1本、前方部で1本設定し、これに基づき2～5番トレンチを設定した。ただ、1番トレンチのみ調査区域の制限から、後円部の直交点より縦軸から南西方向に20度展開して設定した。

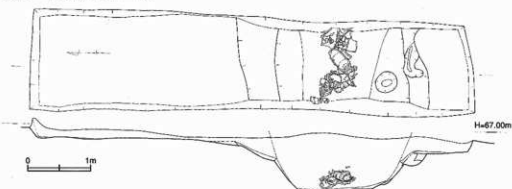
以下においては、各トレンチの調査結果について報告を行う。

1) トレンチの調査

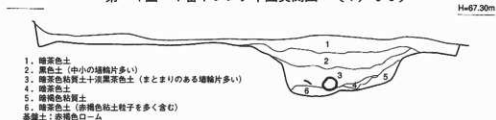
1番トレンチ [1T] (第4・5図、PL2・3)

1番トレンチは後円部の現南西端部に直交点から放射状に延長した線上に設定した。長さ7.0m、幅1.5mの試掘坑であり、後円部上方の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪を採取する事を目的とした。周溝内端部を後円部直交点より12.3m、現墳端より5.2mの位置で検出した。周溝規模は幅3.1m、深さ0.7mを測り、断面形は逆凸字形を呈する。

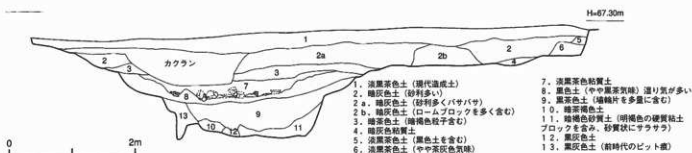
周溝底面の標高は66.0mである。埋土は、上層がクロボク質土で中小の埴輪破片が多く、下層は淡い黒茶色系の堆積土で、まとまった埴輪片が床面から10cm上位で多量に出土した。元位置を保つものは認められないが、朝顔形埴輪の出土が比較的目立つのは注目される。墳丘からの落石等と考えられる石材については確認出来なかった。また、周溝検出上端面より上位の堆積土は、全て耕作土、又は、それに由来する土質のみで構成されており、過去に果樹園造成に係る大規模な開削があったと思われる。



第4図 1番トレンチ平面実測図 [1/60]



第5図 1番トレンチ東壁土層実測図 [1/60]



第 6 図 2 番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]

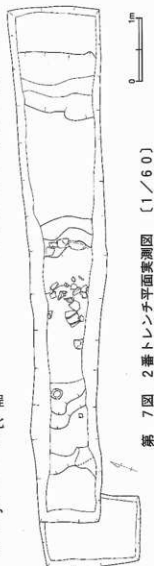
2 番トレンチ [2T] (第 6・7 図、PL3・4)

2 番トレンチは後円部の直交点から横軸に延長した線上に設定した。長さ 9.0 m、幅 1.5 m の試掘坑であり、後円部西側の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪を採取する事を目的とした。周溝内端部を後円部直交点より 10.9 m、現墳端より 4.5 m の位置で検出した。周溝規模は幅 4.4 m、深さ 1.2 m を測り、断面形は逆凸字形を呈する。周溝底面の標高は 65.4 m である。埋土は、上層が黒茶色系粘質土、及び、クロボク質土で構成される。第 7 層は第 8 層を切り込むような流入状況を呈しており、下部には 20~30 cm 大の角礫が多数不規則な状態で埋没している。一部に河原石状の円礫も含まれる事から葦石の可能性もあるが、同様の埋没石は 2 番トレンチでしか見られず、埋没層位や位置的状況から、過去に後円部の埋葬主体部が盗掘された可能性が高い。下層は黒茶系の堆積土で、まとまった埴輪片が床面から 40 cm 上位で多量に出土した。元位置を保つものは認められない。第 13 層は前時代のピット痕で、弥生式土器が出土しているが、細片である為、図化していない。

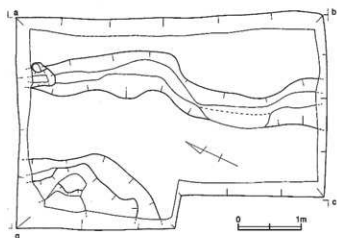
3 番トレンチ [3T] (第 8~11 図、PL5)

3 番トレンチは縦軸、及び、後円部横軸の平行線上にトレンチラインを想定し、後円部直交点から西 7.0 m 上のポイントを南東側の基準として設定した。当初、長さ 5.0 m (南北)、幅 3.0 m (東西) の試掘坑として設定したが、調査の過程で拡張の必要性が生じ、長さ 2.5 m (南北)、幅 0.5 m (東西) 分をトレンチ北西端に追加した。くびれ部における墳端、及び、周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪を採取する事を目的とした。くびれ部内端は後円部直交軸より北西に 1.1 m の位置で検出した。トレンチ内における周溝底面は検出面より 0.7 m 下位にあり、深さ 0.7 m を測る。周溝底面の標高は 65.7 m である。埋土は、上層がクロボク質土で中小の埴輪破片が出土、下層は淡い黒茶系の堆積土で、まとまった埴輪片が床面から 20~30 cm 上位で出土した。また、第 6 層からは須恵器器台の肩部破片も出土した。遺物出土量は比較的少なかった。

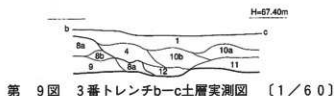
2 番トレンチ内で一部検出していた小溝は 3 番トレンチ内でも検出したが、小溝上面において近世陶器破片が出土した為江戸期以降の所産である事が判明した。その小溝も最下部のみの遺存であり、近世以降の開削が予想以上に大規模だった事を裏付けている。しかし、東側・南側土層では一部に暗褐色土と暗茶灰色土の互層 (第 7・8 層) も見られ、後円部墳丘盛土が部分的に表出しているものと思われる。



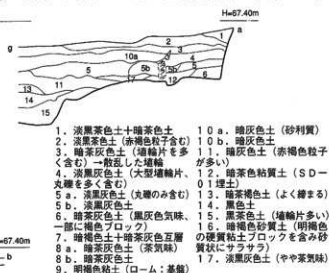
第 7 図 2 番トレンチ南壁土層実測図 [1/60]



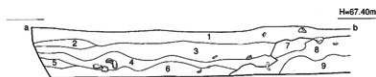
第 8 図 3 番トレンチ平面実測図 [1/60]



第 9 図 3 番トレンチb-c土層実測図 [1/60]



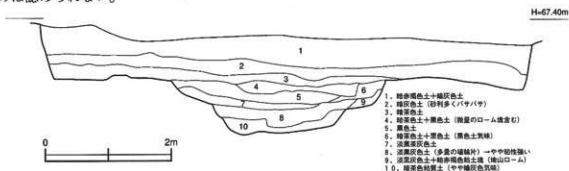
第 10 図 3 番トレンチg-a土層実測図 [1/60]



第 11 図 3 番トレンチa-b土層実測図 [1/60]

4 番トレンチ [4T] (第 12・13 図、PL6)

4 番トレンチは前方部の直交点から横軸を北に 3m 垂直移動した線上にトレンチラインを想定し、前方部直交点から西 10.6m 上のポイントを南東側の基準として設定した。長さ 8.0m、幅 1.5m の試掘坑であり、前方部北西端部と周溝の規模を確認し、併せて前方部から崩落した埴輪を採取する事を目的とした。周溝内端部を前方部直交点より西方向に 12.6m、現墳端より 3.5m の位置で検出した。周溝は 2 段に落ちており、規模は幅 2.4m～3.8m、深さ 0.95m を測り、断面形は逆凸字形を呈する。周溝底面の標高は 65.6m である。埋土は、上層がクロボク質土を中心とした黒色系で構成される。周溝外端部直下付近では、人頭大の円礫が数点不規則な状態で見られ、葺石の可能性もあるが判然とはしない。下層は黒灰色、及び、暗茶色系の粘質堆積土で、まとまった埴輪片が床面から 20cm 上位で多量に出土した。元位置を保つものは認められない。

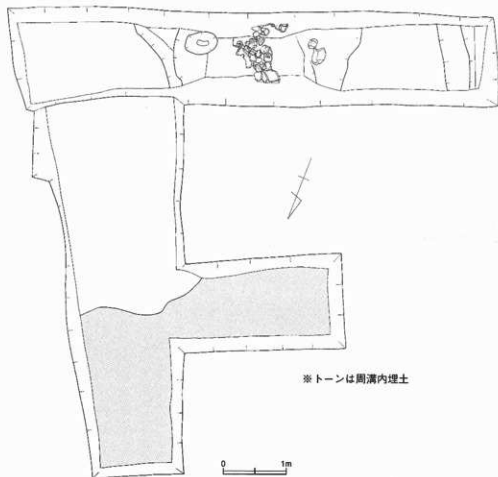


第 12 図 4 番トレンチ南壁土層実測図 [1/60]

5 番トレンチ [5T] (第 13 図、PL7)

5 番トレンチは、4 番トレンチの東端から北に直交するトレンチラインを想定し、縦軸に対し平行する形でトレンチを設定した。調査区域の制限から、一部変則的な設定となった。長さ 6.0m、幅 1.5m～2.0m。

7 mの試掘坑であり、前方部北西端部と周溝の規模を確認する事を目的とした。調査過程において、前方部端部を確定するに至らなかった為、急速トレンチ西側中央部に長さ2.6 m、幅1.5 mのミニトレンチを追加。トレンチの拡張を行った。結果、墳丘上端部を前方部直交点より西方向に15.6 m、現墳端より4.5 mの位置で検出した。周溝部分は未掘であり、その規模については確認出来ていないが、これまでの成果と大差はないと思われる。



第13図 4番・5番トレンチ平面実測図 [1/60]

2) 出土遺物

須恵器

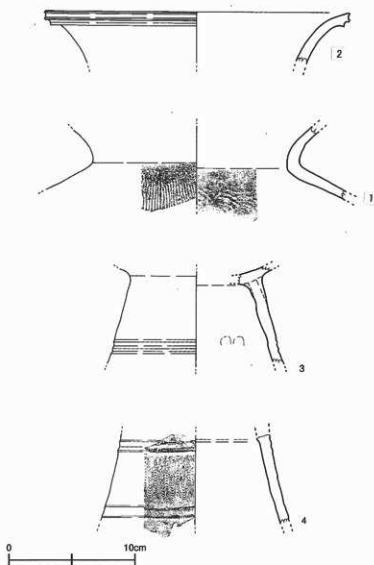
1は甕頸部の破片で、頸部径15.4 cmを測る。内湾気味の胴部から頸部

で大きく屈曲し外反する。外面は丁寧な平行叩き、内面は当て具痕をナデ消す。色調は外面が淡紫色、内面は暗青灰色を呈する。胎土は非常に精緻で淡紫色を発色しており、焼成の良さを示している。2は甕口縁部の破片で、復原口径24.2 cmを測る。比較的整美に成形されており、口縁端部をわずかにつまみ上げ、端部直下に凸線を2条つまみ出している。内外面共に回転ナデにより丁寧に仕上げる。色調は内外面暗青灰色を呈し、内面には一部に釉薬が付着する。胎土は非常に精緻で淡紫色を発色し、焼成は良好。1と同一個体の可能性が高い。3・4は器台脚部の破片である。3は坏部底面が一部遺存している。内底面の調整は不明だが、当て具の痕跡は見られない。外面下半には鈍い凸線が巡り、坏部接合面との間に文様帯を構成する。文様帯には幅広の櫛描波状文が1条巡る。また、凸線上半部の文様帯には長方形、下半部には三角形の透孔が交互に四方配置されている。内面はナデと指オサエで調整を施す。色調は内外面共に暗青灰色を呈し、胎土は精良である。4は脚部中位の破片で、非常に鈍い凸線により3段に区切られている。各段には透孔が交互に配されており、上・下段は長三角形、中段には長方形があげられる。また、中段は文様帯になっており、幅広の櫛描波状文が1条巡っている。調整は内外面共にナデが施されており、色調も共に白灰色を呈す。胎土は精良であるが、焼成やや悪く、若干乾質気味である。

円筒埴輪

全トレンチから出土し、最も出土量が多い。パンコンテナー10数箱分を数えるが、小破片が多数を占めており、朝顔形埴輪との区別は非常に困難であり、厳密な意味での識別は出来ていない。ここでは、形態的に円筒埴輪の一群と捉えられる個体を取り上げ、図示を行った。

比較的小規模な調査であった為か、予想以上に出土状況が悪く、又、個体によっては著しい風化に見舞われており、完形品として復原されたものは一点もない。



第14図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 【1/3】

ら外方に延びていた口縁が、端部直下で更に屈曲し大きく外反する。磨滅著しく、調整は不明。色調は明黄褐色を呈し、焼成は不良。18は頸部から胴部中位までのもので、頸部径18.2cmを測る。あまり締まらない頸部に撫肩気味の肩部がつく。頸部には突帯、やや厚手の突帯を垂直面に対し、若干斜角気味に貼付する。調整は外面が荒い縦ハケ、内面は指オサエ後ナデを施す。色調は内外面共に淡黄茶色を呈す。焼成はやや不良。19は頸部から胴部中位のもので、頸部径14.6cmを測る。あまり締まらない頸部に撫肩の肩部がつく。頸部突帯は厚みがなく、器物垂直面に対し、平行に貼付する。調整は外面が荒い縦ハケ、内面は指オサエ後ナデを施す。色調は、外面が淡黄茶色、内面は淡茶褐色を呈す。焼成はやや不良。20は口縁部中位から胴部下位までのもので、頸部径18.4cmを測る。やや怒り肩気味の肩部であるため、頸部は締まり良く見える。現存する高さ50cmの間に胴部突帯が3本巡り、4段部分が遺存している。その内、円形透孔は1段目と3段目に2方に持ち、2段目にはあけられていない。調整は外面が荒い縦ハケ、内面は指オサエ後斜め方向のナデを施す。色調は淡茶褐色を呈す。

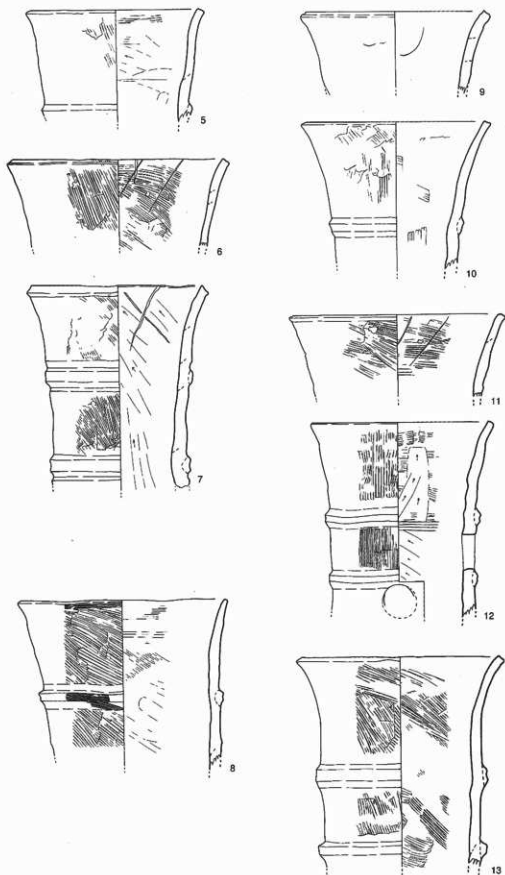
円筒埴輪（基部）

21～24は基部の破片で、全て円筒埴輪である。21・22はやや小型で、底径は21が17.4cm、22が18.6cmを測る。21の最下段突帯には押圧技法が用いられている。23・24は中型で、底径は23が22cm、24が20.4cmを測る。全て調整は外面が荒い縦ハケで、内面は斜方向の指ナデを施す。色調は淡茶褐色（21～23）～黄茶色（24）を呈す。24はやや軟質でもろい。

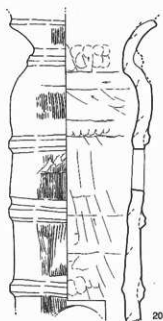
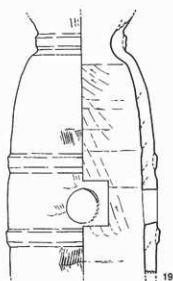
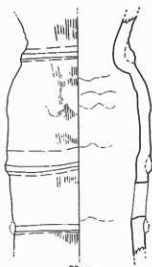
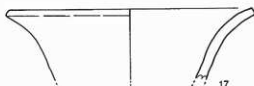
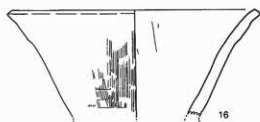
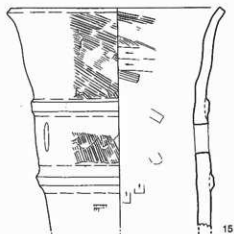
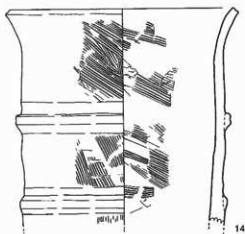
5～15は口縁部周辺の破片で、その形態よりA・B2種類に大別出来る。A類は口縁を大きく外方に反らせるもので、口縁端部の整形の差から、平坦に仕上げたA-1類、丸みを持たせたA-2類に分類した。A-1類は5～7、9～13であり、A-2類は8が該当する。B類は直立した胴部から、口縁端部直下で短く外反する口縁を有するもので、14・15が該当する。調整手法については、A・B類共に外面は荒い斜ハケ（右下方より左上方）、内面は指ナデ、及び、斜ハケ（外面同様）、又は、指ナデのみ等の共通点が指摘出来るが、一方では12のように外面に縦ハケを施すものも一部に見られ、後述する朝顔形埴輪との接点も見出す事が出来る。

朝顔形埴輪

16～20は朝顔形埴輪で、16・17は口縁部の破片、18～20は頸部から胴部下位にかけての破片である。16は口縁端部から中位までの破片で、口縁部径は40cmを測る比較的大型のものである。外面は荒い縦ハケを施した後、口縁端部付近のみ指オサエとナデで調整している。内面は荒い横ハケ後、丁寧なナデを施す。色調は内外面共に黄茶褐色を呈し、焼成は良好で堅緻。17は口縁端部から中位にかけての破片で、口径39.5cmの大型品。中位か



第15図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 【1/6】

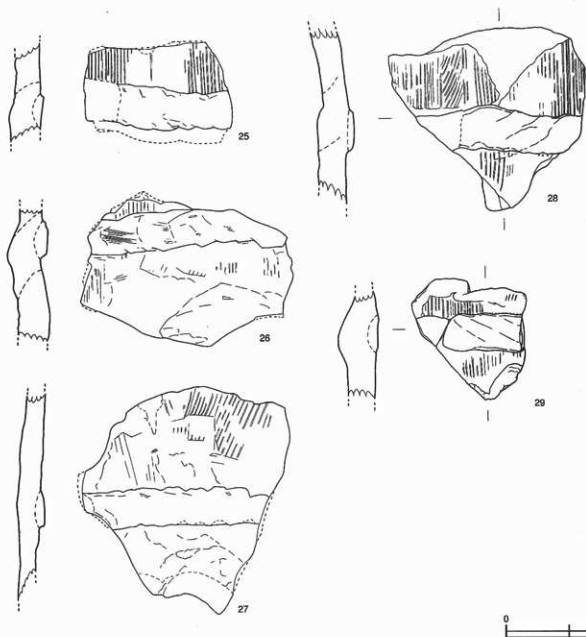
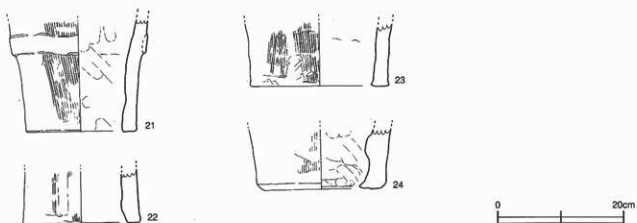


第16図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/6]

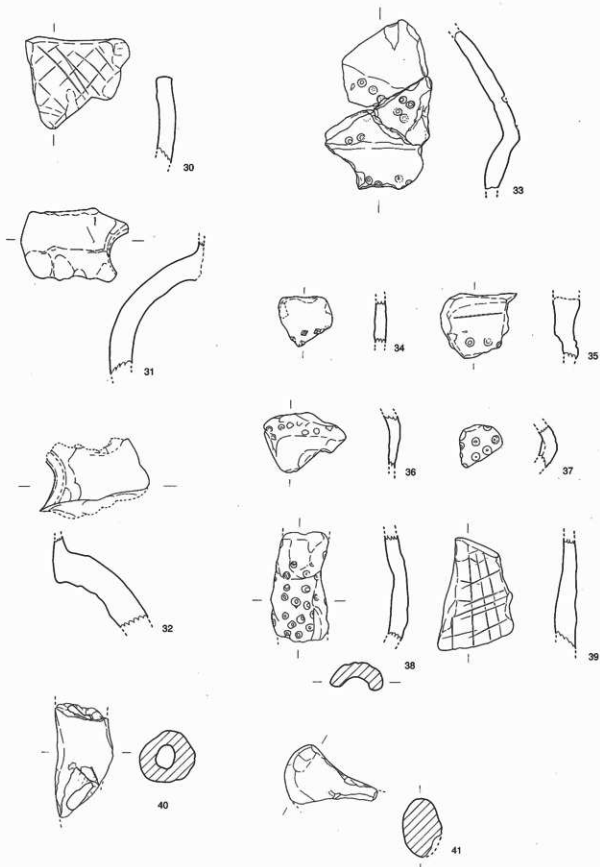
25～29は最下段突帯に押圧技法が用いられている破片である。円筒埴輪と朝顔形埴輪の識別はしていない。突帯貼付はⅠ・Ⅱ類に大別出来る。Ⅰ類は粘土の小塊を反時計方向に貼り付け、右方向から左方向に撫でるもので、Ⅱ類は帯状粘土を貼り付け撫でるものである。いずれの個体にも器表面の調整等に殆ど差は認められない為、製作工人の差に起因する事象と思われる。

形象埴輪

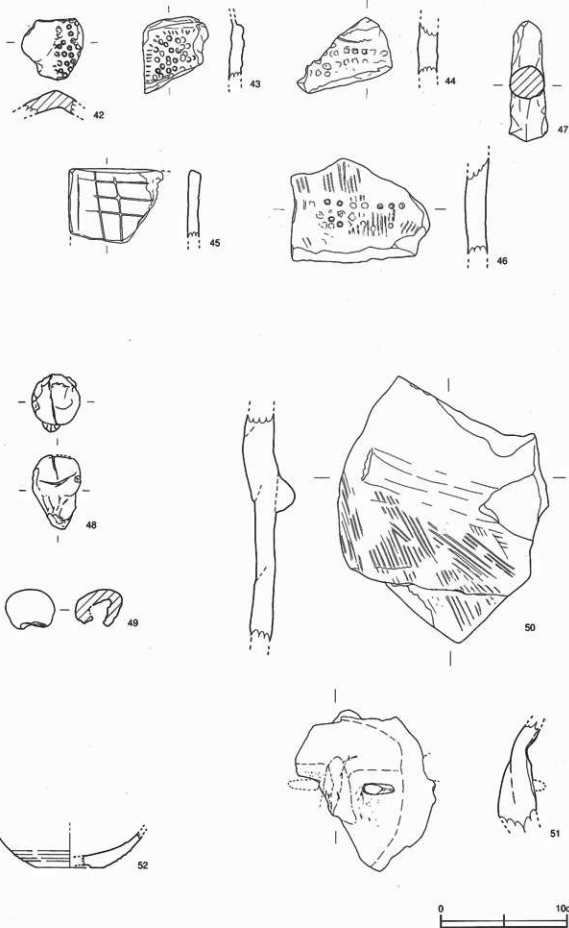
人物、動物（馬、犬又は猪）、器財（盾？）等があるが、大半のものが破片資料で、全体像が判明するものは無い。30～41はトレンチ内出土品、42～51は調査開始直後に行った散乱資料採集作業によって発見した表採品である。30～32は1番トレンチで出土した。30は人物、又は、盾と思われる。31、32は不明だが、32は人物の肩部の可能性がある。33、34は2番トレンチで出土。共に人物と思われる、



第17図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [21~24は1/6、25~29は1/3]



第18図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 [1/3]



第19図 釘崎1号古墳 出土遺物実測図 (1/3)

33には竹管文、34には菱形刺突文が施されている。35～41は3番トレンチで出土。35～38は人物と思われるが、部位不明。竹管文、菱形刺突文が施される。39は不明。40は人物の腕か。41は大、又は、猪の尻尾であろう。42～44は人物か。43は外端部が細く鱗状に延びる。45は盾、46は不明。47は棒状の製品。動物の尻尾の類だろうか。48は鈴で、へら状工具による切り込みで表現している。馬形埴輪に伴う馬鈴と思われる。49は鈴状であるが、表現無く不明。中は中空。50は馬の胸繫で、中央にある突帯状のものは手綱と思われる。51は人物の顔で、巫女か。非常に柔らかな表情をしている。表面には赤色顔料が塗付され、前頭部内面には「へ」字状に折曲げた粘土帯が貼り付けられている。頭頂部の飾りを固定する用途があったのだろう。

その他の遺物

52は3番トレンチ第8層上面より出土した碗形の陶器である。

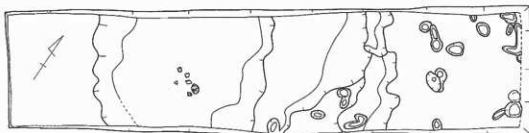
2 丸山古墳

今回は、当該古墳の将来的な修復、及び、整備計画策定を念頭に置いた基礎的データを、必要最小限度の範囲において掘削を伴う調査をもって収集する事を目的に行った。

調査は、まず現況における詳細な墳丘測量図を作成する事から着手した。幸い、昭和55年に八女市の依頼により福岡県教育委員会が実施した墳丘測量時の基準点が残されていた為、今回もこれを基準点として用い、仮主軸線(縦軸)を設定した。設定した縦軸に対し、これに直交する横軸を後円部で1本、くびれ部上で1本、前方部で1本の計3本の横軸を設定し、縦・横軸を基準として各トレンチの位置を決定した。ただ、縦軸の南側延長線上の後円部南端部においては、現在民有地である為トレンチの設定は行わなかった。

以下においては、各トレンチの調査結果について報告を行う。

1) トレンチの調査



第20図 1番トレンチ平面実測図 [1/60]

1. 黄褐色土(黄土)
- 2a. 黄褐色土
- 2b. 黄褐色土(赤色斑。跡まはり跡に近くハサついている。)
3. 黄褐色土(黄褐色土)
4. 黄褐色土(5~10cmの円形の跡をわずかに含む。若干跡まる)
5. 黄褐色土(大小の角礫をわずかに含む。跡まわっている。)
6. 黄褐色土(黄褐色土ブロックを多く含む。強弱)
7. 黄褐色土(黄褐色土ブロックを多く含む。強弱)
8. 黄褐色土(黄褐色土)
9. 黄褐色土(黄褐色土)
10. 黄褐色土(黄褐色土)
11. 黄褐色土(黄褐色土)
12. 黄褐色土
13. 黄褐色土(黄褐色土)
14. 黄褐色土(黄褐色土)
15. 黄褐色土(黄褐色土)

16. 黄褐色土(黄褐色土)
17. 黄褐色土(黄褐色土)
18. 黄褐色土(黄褐色土)
19. 黄褐色土(黄褐色土)
20. 黄褐色土(黄褐色土)
21. 黄褐色土(黄褐色土)
22. 黄褐色土(黄褐色土)
23. 黄褐色土(黄褐色土)
24. 黄褐色土(黄褐色土)
25. 黄褐色土(黄褐色土)
26. 黄褐色土(黄褐色土)
27. 黄褐色土(黄褐色土)
28. 黄褐色土(黄褐色土)
29. 黄褐色土(黄褐色土)
30. 黄褐色土(黄褐色土)
31. 黄褐色土(黄褐色土)
32. 黄褐色土(黄褐色土)
33. 黄褐色土(黄褐色土)
34. 黄褐色土(黄褐色土)
35. 黄褐色土(黄褐色土)
36. 黄褐色土(黄褐色土)
37. 黄褐色土(黄褐色土)
38. 黄褐色土(黄褐色土)
39. 黄褐色土(黄褐色土)
40. 黄褐色土(黄褐色土)
41. 黄褐色土(黄褐色土)
42. 黄褐色土(黄褐色土)
43. 黄褐色土(黄褐色土)
44. 黄褐色土(黄褐色土)
45. 黄褐色土(黄褐色土)
46. 黄褐色土(黄褐色土)
47. 黄褐色土(黄褐色土)
48. 黄褐色土(黄褐色土)
49. 黄褐色土(黄褐色土)
50. 黄褐色土(黄褐色土)
51. 黄褐色土(黄褐色土)
52. 黄褐色土(黄褐色土)



第21図 1番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]

1番トレンチ [1T] (第20・21図、PL9)

1番トレンチは後円部直交点から横軸に沿って南西に延長した線上、墳丘1段目平坦面から墳丘端部までの部分に設定した。長さ8.6m、幅20mの試掘坑であり、後円部西側の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪を採集する事を目的とした。周溝内端部を後円部直交点より14.0m、現墳端より0.8mの位置で検出した。

周溝規模は幅2.8m、深さ0.4mを測り、断面形はゆるやかな船底形を呈する。周溝底面の標高は53.9mである。

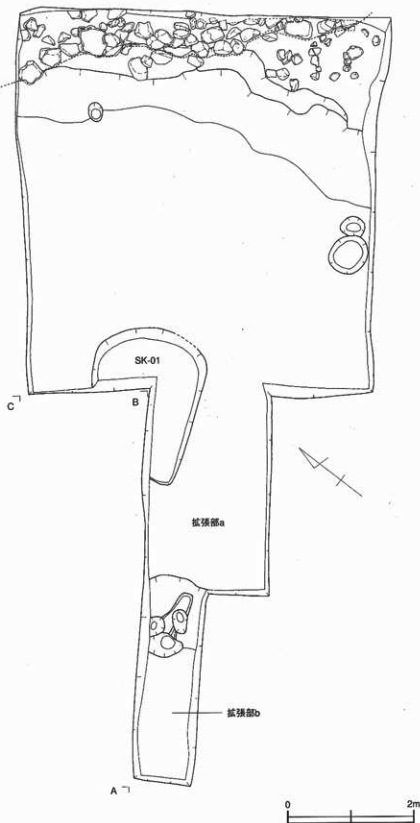
墳丘の盛土は1段目8層分が確認出来ている。軟弱な黒色土で構成される旧表土上にA層、及び、6~8層の薄層を交互に堅く盛り上げて整地を行い、平坦面の基礎としている。更に整地層上に2a~4層を盛り、墳丘1段目を成す。全体的に周溝端部に向かい盛土が傾斜する特徴がある。

周溝内埋土は13~15層が確認出来る。周溝内出土遺物の大半は14層中にあり、底面より10cm程の位置に集中している。須恵器高坏等の出土がある。

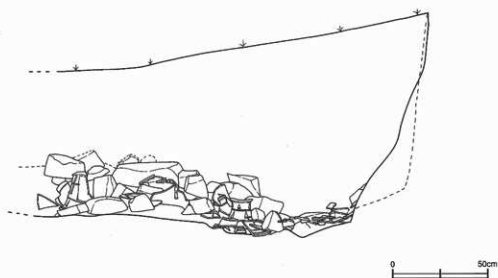
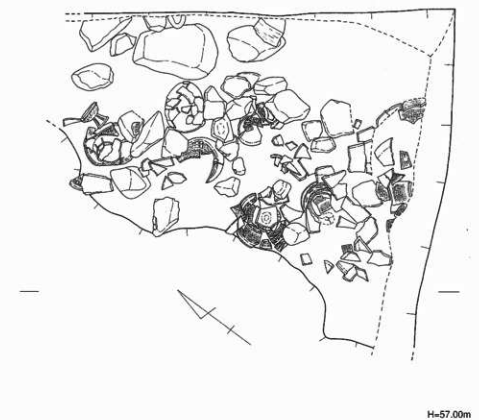
2番トレンチ [2T]

(第23~28図、PL10・11)

2番トレンチはくびれ部直交点から横軸に沿って南西に延長した線上を中心とし、墳丘1段目平坦面からくびれ部端にかけてくびれ部の全容、及び、周溝が周溝が判明するよう設定した。当初、6m×6mのトレンチ規模を予定していたが、周溝を捉える事が出来ず、止むを得なく横軸線上に2回(拡張部a, b)トレンチを拡張した。結果、長さは最大で12mの長大なトレンチ設定となった。墳丘については、標高55.5m~55.7m付近に1段目平坦部が遺存し、多数の葺石と共に、墓前祭祀に伴うものと考えられる須恵器群が出土した。葺石の大半は30cm~40cm大の丸礫で、片岩系風化土が基盤となっている本台地上での採集は不可能な為、本古墳南を西流する矢

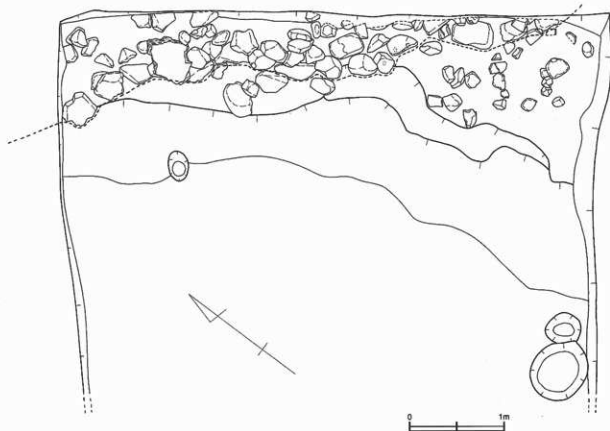


第23図 2番トレンチ平面実測図 [1/60]

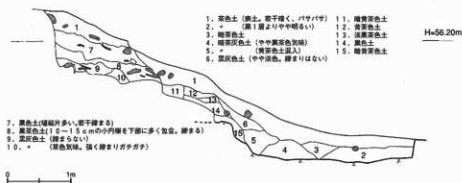


第24図 2番トレンチ くびれ部須恵器群出土状況実測図 (1/20)

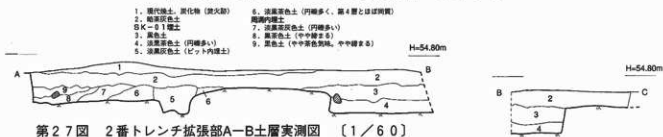
部川より河原石を採集・搬入したと考えられる。須恵器群には高坏形器台、高坏、甕、壺、大甕等があり、坏蓋類を含まない点特徴的である。墳丘の盛土は8～10層までと思われ、それより上位の層は流出土が主体を占めている。第10層は盛土中でも非常に堅く締まっており、墳丘形態から予想される埋葬主体部の前庭部がくびれ付近に存在する可能性もあり、第10層はそれに伴う構成土であるかもしれない。周溝については、その内端部と思われる落ち込みを拡張部内において、くびれ部直交点より13.0m、現墳端より6.0mの位置で検出した。規模については調査区域の制約もあり判然としなが、現状において深さ20cm～30cmを測る。断面は船底状を呈する。内端直下にはビットがあり、赤焼けの須恵器高坏の坏部が2個



第25図 2番トレンチ くびれ部葺石平面実測図 [1/40]



第26図 2番トレンチ 東壁土層実測図 [1/60]



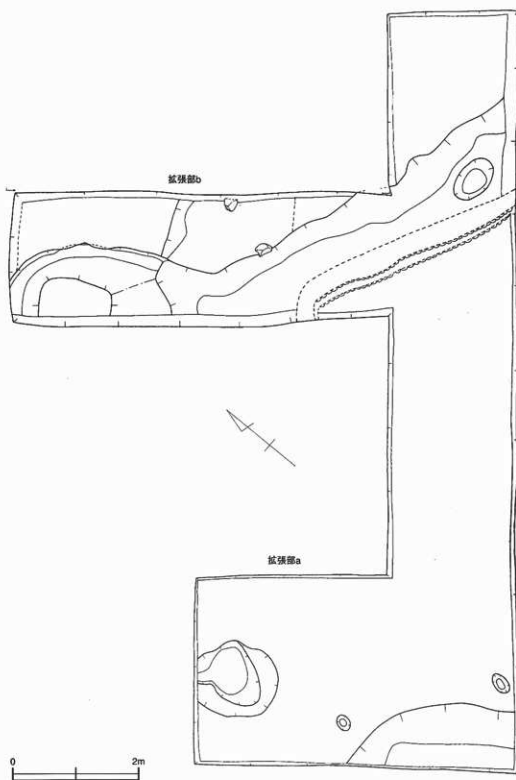
第28図 2番トレンチ拡張部B-C土層実測図 [1/60]

体出土している。

3番トレンチ [3T] (第29・30図、PL11・12)

3番トレンチは前方部直交点から縦・横軸を平行に移動させ、交点より北西10.0mにポイントを置き、

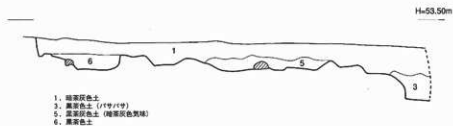
そのポイントを中心に軸線に沿って設定した。当初は長さ12.0m、幅2.0mのトレンチを設定していたが、後述する4番トレンチ内で前方部側の周溝を捉えた為、指導委員会の助言もあり、西端に3m×3mの正方形トレンチ（拡張部a以下、3T-a）、前方部寄りの東側に6m×2mの長方形トレンチ（拡張部b以下、3T-b）を追加した。予想通り3T-bでは周溝と思われる溝状の窪みを検出した。規模は幅約1.8m、深さ20cmを測るが、周囲の削平は著しく、比高差を考えると、3T-aで周溝が検出される事はほぼ不可能と考えられた。しかし、3T-aでは明確な落ち込みは見られなかったものの、前方部前面を基準として後円部中心に向かい75度に開く地山変換点が検出され、3T-bと4番トレンチにおける周溝内端の方向性が一致する事もあり、これが前方部北西端部を示している蓋然性は高いと考える。3T-bの周溝内埋土からは円筒埴輪片や転石が出土している。



第29図 3番トレンチ平面実測図 [1/60]

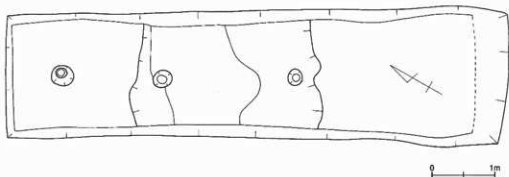
4番トレンチ [4T] (第31・32図、PL12)

4番トレンチは縦軸を中心として設定した。トレンチ南端は前方部直交軸より北へ8.0mにあり、長さ



第30図 3番トレンチ拡張部b東壁土層実測図 [1/60]

8.0m、幅2.0mの試掘坑である。周溝の規模と前方部端を確認し、あわせて墳丘上より崩落した埴輪を採集する事を目的とした。周溝内端部は前方部直交点より11.5m、現墳端より1.5mの位置で検出した。周溝規模は幅2.9m、深さ42cmを測り、断面形はやや深い船底形を呈している。周溝底面の標高は52.6mである。また、トレンチ内にはピットが3穴あり、周溝内に2穴、周溝外に1穴が縦軸線に沿って直線上に並んでいる。周溝内からは円筒埴輪片や転石が出土した。



第31図 4番トレンチ平面実測図 [1/60]



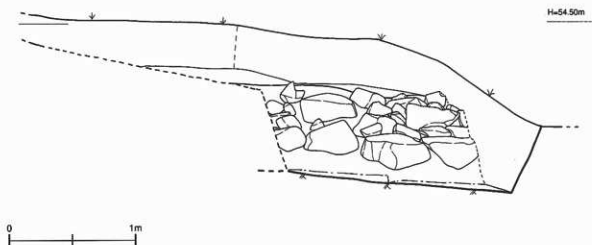
第32図 4番トレンチ東壁土層実測図 [1/60]

5番トレンチ [5T] (第33～35図、PL13)

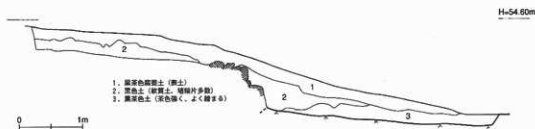
5番トレンチは前方部直交点から縦・横軸を平行に移動させ、交点より北東14.2mにポイントを置き、ポイントを中心に軸線に沿って設定した。当初は長さ6.0m、幅4.0mのトレンチを設定していたが、周溝が判然としなかった為、北東隅に長さ1.5m、幅1.0mの長方形トレンチを追加、拡張した。前方部北東端部検出を主眼に置いたトレンチであったが、調査区域の制限から、端部の検出には到らなかった。しかし、トレンチ内で古墳築造当初の状態を限りなく良く残した1段目斜面の葦石、及び、1段目平坦面を検出する事が出来、3T-b、及び、4Tの結果から、北東端部の位置が推定出来た。本トレンチ内の葦石に使用されている石材は概ね30cm大のものであるが、トレンチ中央北端付近の1段目の石材は50cmを超えるものがあり、この先間近に端部が存在する事を示唆している。墳丘1段目平坦面は一面強く締まる黒色土で被覆されており、暗茶色粘質土の地山上を黒色土で被覆・整地し、葦石を貼ったようである。葦石1段目直下の標高は



第33図 5番トレンチ平面実測図 [1/60]



第34図 5番トレンチ葦石検出状況 [1/30]

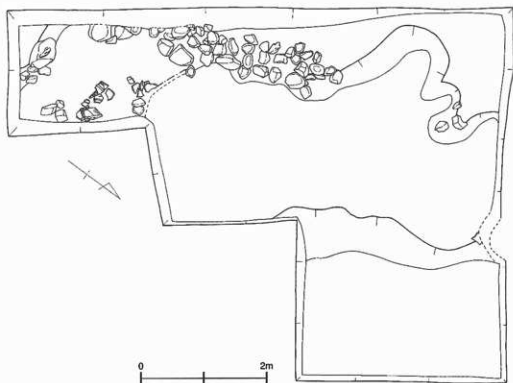


第35図 5番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]

53.2m、最上段では53.9m、墳丘1段目平坦面では54.15mを測り、東側前方部の墳丘1段目の高さは約1.0m前後である。周溝についてはトレンチ内での検出は出来なかった。ただ、地山は北東に向かい、その標高を徐々に減じているのに対し、第3層は水平に堆積していることから、東側前方部の一部には周溝は存在せず、かわりに整地のみで終わらせていた可能性もある。

6番トレンチ [6T] (第36図、PL14・15)

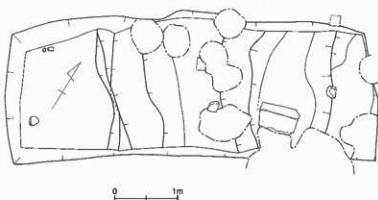
6番トレンチはくびれ部直交点から横軸に沿って北東に延長した線上を中心とし、墳丘1段目平坦面からくびれ部端にかけて設定し、くびれ部の全容、及び、周溝の確認を目的とした。当初、長さ8.0m、幅6.0mのトレンチを予定していたが、墳丘東側にある竹林に行動を制限され、やむなくトレンチ北東隅を竹根を避けるよう階段状に縮小した。掘削開始後しばらくすると、多量の丸礫が軟質黒色土と共に出土した。それらの石を除去すると、下部より面の合う石列が検出された為、これを追う形で進行させた。検出した石列は5T検出の石列に向かい延びているが、比高差は約1.0mある。ただ、石列は後円部側から前方部に向け、途切れながらも、その標高をわずかず減じ前方部端に向かっており、やや小ぶりの石材ではあるものの、5T石列と接続する可能性は非常に濃く、又、石列の中には墳丘中心部に向かって縦方向に規則的に並ぶものも見られる為、本石列が葦石の表出である蓋然性は極めて高い。墳丘1段目平坦面、及び、葦石の構築過程は5Tのそれと同様である。葦石1段目直下の標高は54.5m～54.7m、最上段では54.9m～55.1m、墳丘1段目平坦面では54.9m～55.1mを測り、くびれ部の墳丘1段目の高さは約30cm前後である。5Tと同様、葦石の北東側前面に黒茶色土の堆積が見られ、整地層と思われるが、地山と共にそのレベルを減じ、縦軸より1.1m～1.2mの位置で途切れる。地山はそこから更に1段落ち、そのまま水平を維持している。トレンチ南側隅には50cm超の大型石材があり、前方部に沿っていた小型石材の葦石群の方向に対し、直角近くに折れている。この地点が端部、つまりくびれ部である蓋然性は高いと思われる。



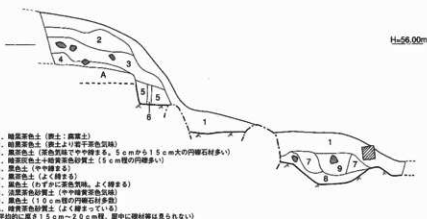
第36図 6番トレンチ平面実測図 [1/60]

7番トレンチ [7T] (第37・38図, PL15)

7番トレンチは後円部直交点から横軸に沿って北東に延長した線上に設定した。トレンチの南端は後円部直交点から12.0mの位置にあり、これを中心として長さ6.0m、幅2.4mを測る長方形の試掘坑である。後円部左側の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪を採集する事を目的とした。本トレンチ周辺は近年まで近現代墓が造営されており、地形の改変が著しく、トレンチ内にも墓石の転石が多数見られた。しかし、墳丘本体は比較的残りは良く、墳丘1段目平坦面以下の盛土については観察できた。旧表土上に茶色・褐色系の盛土で整地する過程は1Tと同様であるが、整地土に粘性の低い砂質土を用いる等、1Tに比較して墳丘の構築過程にやや省力化の感がある。周溝に関しては、後円部直交軸より15.8mの位置で周溝とおぼしき溝状の落ち込みを検出しているが、これまでに検出した周溝と比較し規模が異なり過ぎている点



第37図 7番トレンチ平面実測図 [1/60]



第38図 7番トレンチ北壁土層実測図 [1/60]

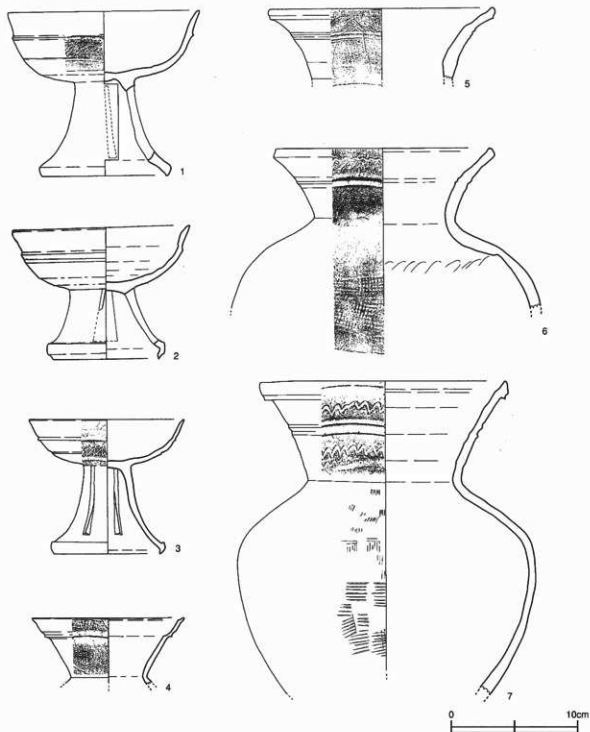
1. 埴輪盛土 (黄土・黄褐色)
2. 埴輪盛土 (黄土より若干茶色混入)
3. 黄褐色土 (茶色灰層でやや硬まる。5cmから15cm大の円礫石材多い)
4. 黄褐色土+粗黄褐色砂質土 (5cm程度の円礫石多い)
5. 黄褐色土 (やや硬まる)
6. 黄褐色土 (よく硬まる)
7. 黄褐色土 (わずかに茶色混入。よく硬まる)
8. 黄褐色砂質土 (やや硬まる茶色混入)
9. 黄褐色土 (10cm程度の円礫石材多数)
- A. 埴輪盛土 (よく硬まる。15cm程度に埋め込まれている)

が氣に掛かる。規模は幅1.2m、深さ0.3mを測り、底面の標高は53.8mである。円筒埴輪が多く出土した。

2) 出土遺物

須恵器 (1は1Trより出土。他は2Trより出土)

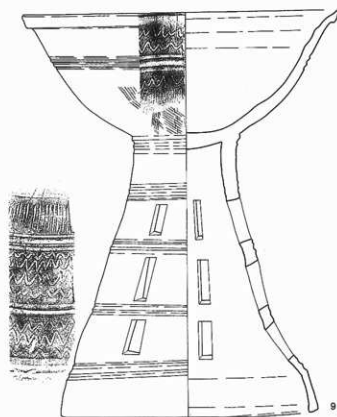
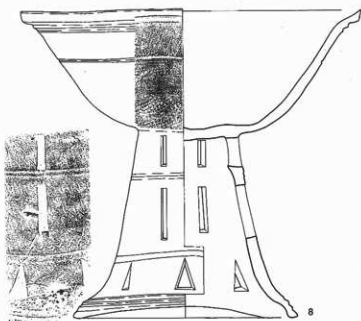
1～3は無蓋の高坏である。1の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味を持つ。体部にはやや鈍い凸線と浅い沈線が巡り、その間を文様帯として波状文を1条描する。沈線直下から底部までヘラ削りが施される。脚部はラッパ状に細く、やや長めに開き、端部は垂下し接地する。端部は鈍く、丸くおさめる。外面はナデ仕上げで、3方に長方形透孔が刀子状工具により配される。色調は暗緑灰色を呈し、2～3の砂粒をわずかに含む。焼成はやや甘い。器高13.1cm、口径15.0cm、復原底径9.9cmを測る。2の口縁部は、中位程で直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する。端部はやや丸いが、細い。体部には2条の凸線が巡る。脚部は短く大きく開き、透孔を4方に配する。端部は垂下し鋭く収める。外面はナデ仕上げで、胎土には1～2の砂粒が含まれる。色調は坏部が暗青灰色で、脚部の一部には淡紫色が発色する。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は良好。器高10.4cm、口径13.9cm、底径8.2cmを測る。3は、体部～口縁部が緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。体部中位には鈍い凸線とやや深い沈線があり、その間に文様帯がある。文様帯には幅の短い櫛描波状文が1条巡る。体部下半はヘラ削りされる。脚部はラッパ状に開き、透孔を4方に配する。透孔の長辺は全て面取りが施されており、丁寧な作りとなっている。端部は垂下し、鋭くおさめる。胎土は少量の砂粒を含む。色調は、坏部が淡緑灰色で脚部は暗青灰色を呈す。坏部と脚部は別個体と見間違えう程、仕上がりには差が出ている。器高10.6cm、口径12.2cm、底径8.3cmを測る。4は罐の頸部～口縁部の破片で、直線的に延びた頸部から、緩やかに口縁が外反する。端部には段を設け、丸くおさめる。端部下に鋭い凸線を1条巡らせ、その上下に文様帯を設ける。上部文様帯の罫目は5本、下部は20本を数える。色調は青灰色を呈し、焼成は良好。胎土は精緻。復原口径12.0cmを測る。5～7は甕である。5は頸部～口縁部の破片で、緩やかに外反し、端部をつまみ上げ丸く仕上げる。端部直下に1条、頸部に2条の凸線を巡らせ、その間に2本の文様帯を設ける。上部文様帯には振幅の浅い波状文、下部文様帯には振幅の大きい波状文をそれぞれ1条施文する。内外面に自然釉がかかり、光沢がある。色調は内外面とも黒灰色を呈す。胎土は精緻で焼成も良好。復原口径17.6cmを測る。6は胴部上半～口縁の破片で、緩やかに外反し、端部をつまみ上げ丸く仕上げる。中位には非常に鈍い凸線が1条巡り、その上下に文様帯を設け、振幅の浅い櫛描波状文を各1条描く。頸部の変換点付近はナデ、胴部上半は格子目叩きをやや不規則に施す。内面には当て具痕が一部に残る。色調は内外面とも淡緑灰色を呈し、胎土中には黒色細粒が多く含まれる。口径17.0cmを測る。7は胴部中位～口縁の破片で、約1/2が遺存している。直線的に外方に延び、端部は上方につまみ上げ丸く仕上げる。外端面は垂直に整えられ、直下に鋭い凸線を1条巡らせる。頸部中位には2本の凸線を接近させて巡らせ、その上下に文様帯を設ける。上部文様帯は1条、下部文様帯には3条のヘラ描波状文を施文する。肩部は撫肩であるが、胴部との境では強く張る。肩部は縦位の平行叩き後ナデ消し、胴部は横位の平行叩きが施される。胴部外面には2条の施釉帯が見られる。色調は暗紫色の発色が多く認められるが、概ね黒灰色を呈す。焼成は非常に良好で、胎土は少量の砂粒を含むが精緻。口径19.5cmを測る。8～10は高坏形の器台である。8の坏部は緩やかに外反し、口縁端部は上方につまみ上げる。外端部は垂直に仕上げ、直下に鈍い凸線が1条巡る。坏部外面の中位に浅い沈線が巡り、凸線と沈線の間が文様帯となる。文様帯には2条の櫛描波状文が描かれており、2条とも7本歯の原体である。沈線直下は格子目叩きがナデ消され、坏部下半ではカキ目が一部施される。内面下半はナデが施されている。脚部は直線的に外反し、下半付近で大きく外方に屈曲した後、端部付近で内湾気味に端部内側が接地する。外面の上・中・下位には鈍い凸線が巡り、脚部を3段に分けている。それぞれに櫛描波状文が巡り、1段目2条、2段目4条、3段目2条が施される。文様帯には透孔が6方に配され、1段目のみ三角形で千鳥状に並ぶ。端部内外面の一部には、セメント状の砂利が付着している。色調は、坏部が暗灰色、脚部が淡茶灰色を呈す。焼成は良好で、胎土には石英粒子と黒色細粒が多く見られる。器高32.3cm、口径36.2cm、底径24.8cmを測る。9の坏部は斜め上方に外反し、深い。口縁端部は上方につまみ上げ、外端面を垂直に仕上げる。



第39図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]

坏部外面の中位には鈍い凸線が接近して2条巡り、凸線より上位に2条、下位に1条のヘラ描波状文が描かれる。外面下半には縦位・斜位の平行叩きが施され、一部ナデ消している。内面下半はナデが施される。脚部は長く、直線的に外方に延び、端部付近で内傾気味に端部内側が接地する。外面は鈍い凸線・粗雑な沈線により裾部を除く4段に分けられる。1・2段目にはヘラ描波状文が各3条、3段目は縦位のヘラ描文、4段目には、図化出来ていないが、多数の刺突文と円形突孔が7孔以上存在する。1～3段目には長方形の透孔が推定5方に配されている。裾部はカキ目の後、ナデ仕上げである。色調は坏部が黒灰色で脚部が淡灰色を呈すが、全体の約半分に暗紫色の発色があり、焼成は非常に良好である。坏部胎土は石英砂粒を多く含むが、脚部は良く精製されており、石英粒子等は殆ど確認出来ない。器高42.7cm、口径33.3cm、底径27.3cmを測る。10の坏部は緩やかに外反し、広く、やや浅い。口縁端部を強くつまみ上げ、外端面に段を設ける。外端部直下に2条、外面中位に1条の鈍い凸線を巡らせ、凸線間に文様帯を設ける。文様帯には2条の櫛描波状文が描かれ、2条とも6本歯の原体である。坏部外面下半は格子目叩きが施され、下半上

位はナデ消し、下半下位は荒いカキ目で2次調整としている。脚部はラッパ状に外方に延び、やや短い。端部はつまみ出され丸く仕上げる。内端部が接地する。外面は若干鋭さが残る凸線により3段に分けられ、各段に櫛描波状文が描かれる。1段目から、3条、3条、2条が巡る。それぞれ8本歯の原体が使用されている。各段とも三角形の透孔があり、全て千鳥状の5方配置である。脚端部接地面には、焼成時のものと考えられるワラ状の焼成痕が多数残っている。器高29.8cm、口径32.0cm、底径26.1cmを測る。11は中型の壺で、口縁部は短く外反し、端部をわずかにつまみ上げ、若干稜に鋭さを持たせる。胴部はややいびつで、上半部は平瓶状の形態を成す。肩部は一部撫肩をしているが、全体的に張り気味である。外面は胴部下半上位まで平行叩きを密に施し、下半下位は底部も含め格子目叩きを施す。胴部内面は、青海波状の当て具痕を全て丁寧にナデ消す。色調は淡黒灰色を呈し、外面に自然釉が薄くかかり光沢がある。焼成は良好で、胎土には石英砂粒を多く含む。最大径は胴部上半にある。器高38.8cm、口径19.1cm、最大径40.4cmを測る。12は大甕の口縁部破片で、大きく外方に開き、端部をつまみ上げ外端部を垂直に仕上げる。端部直下には

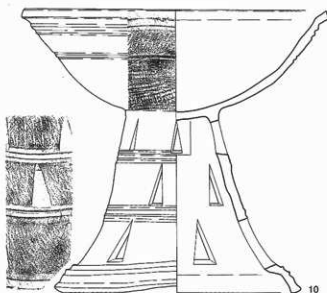


0 10cm

第40図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/4]

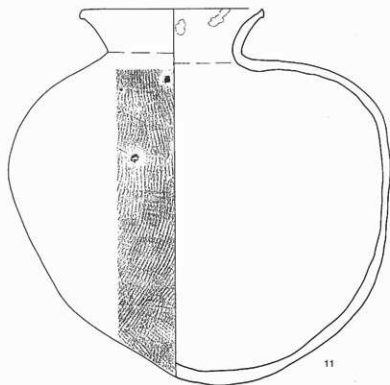
鈍い凸線が1条巡り、又、破片の下半には浅い沈線が施されている。両線の間に振幅の大きな櫛描波状文が1条描かれており、11本、又は、12本歯の原体が使用されている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好。胎土は精緻である。復原口径39.6cmを測る。13・14は赤焼けの須恵器高坏で、坏部のみの遺存である。13は大きく外方に開き、端部はつまみ上げる。沈線により口縁部と体部に分ち、体部下半はヘラ削りの後カキ目で仕上げる。底部外面はヘラ状工具で螺旋状の削りを入れ、脚部の接合を行っている。焼成はやや不良で、器壁はもろいが胎土は精良。口径16.4cmを測る。14の端部は細い帯状の粘土を接合し、

強く屈曲させている。体部下半はヘラ削り後カキ目を施す。焼成はやや不良だが、胎土は精良。復原口径17.6cmを測る。15・16は土師器の坏で、15は内外面ナデ調整、16の外面下半はヘラ削りを施す。15の色調は淡黄茶色で、16は茶褐色を呈する。復原口径は共に14.0cmを測る。17は弥生式土器の甕で、胴部上半～口縁部の破片である。緩やかに外反し、端部は丸い。色調は暗黄茶色を呈し、胎土は雲母・石英砂粒を多量に含む。復原口径28.0cmを測る。



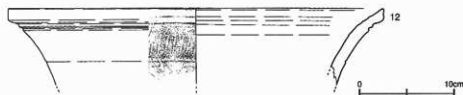
朝顔形埴輪

18～22は朝顔形埴輪で、口縁部の形態差からA・Bの2種類に分類した。A類は口縁部が大きく外方に延び、端部付近でわずかに外反。端部は指ナデにより上方につまみ上げるもので、18・19がこれにあたる。B類は口縁端部直下で強く屈曲させるもので、端部上面を平坦に仕上げ、外面は指ナデにより外方につまみ出す。20・21がこれにあたる。22は胴部の破片である。



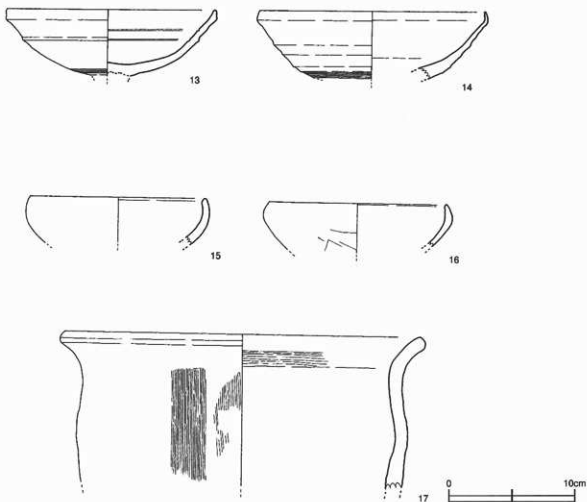
円筒埴輪

出土した破片の殆どが風化著しい小破片で、又、出土総量も膨大な為、ここでは復原後図化に十分な遺存である個体をセレクトし、図示する事とした。口縁部と底部片資料があるが、底部については朝顔形埴輪との厳密な識別は行っておらず、中には多少の混入があるものと思われる。



第41図 丸山古墳 出土遺物実測図 (1/4)

口縁部は、胴部上位から外反しながら斜上方に延びるA類と、直立した胴部から口縁端部直下で外方に強く屈曲するB類の2種類に分類し、更に口縁A類は3つに細分、口縁B類は2つに細分した。



第42図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]

口縁A-1類は23~31が該当し、大きく外反しながら端部を強くナデて凹形にするもの。

口縁A-2類は32~34が該当し、端部を平坦に仕上げる以外は、A-1類と同様である。

口縁A-3類は、直立気味に立ち上がるが、口縁端部付近の屈曲は弱く、端部の仕上げは水平に近い。35~37がこれにあたる。

口縁B-1類は38~42が該当し、器壁にやや厚みがあり、端部は水平、又は、垂下させるもの。

口縁B-2類は43が該当し、口縁を大きく外反させ、器壁はやや薄く、端部は強く指ナデし外方につまみ出す。

底部は、厚みのある底部が垂直方向に立ち上がるA類、斜め外方に直線的に延びるB類、底径が15~18cmと小型のC類、接地面を若干右上りに仕上げ、最下段の突帯が非常に低いD類の4種類に分類し、底部A類を3つ、底部B類を2つに細分した。

底部A-1類は44~56が該当し、基段部分が非常に厚く、接地面が平坦。最下段突帯は接地面から10~12cmに位置している。

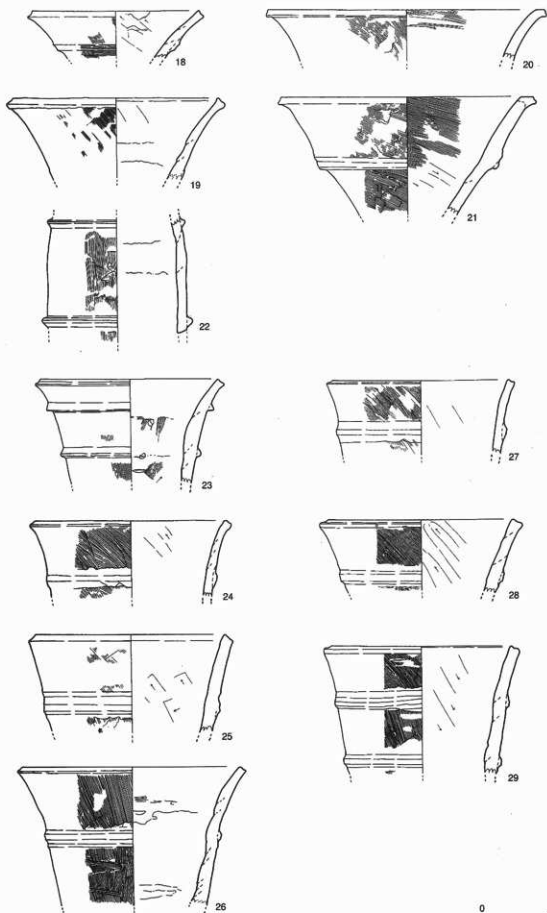
底部A-2類は57~60が該当し、最下段突帯の位置が14cm前後とやや高い以外は、A-1類と同様である。

底部A-3類は61~63が該当し、若干外方に直線的に開く以外は、A-1類と同様である。

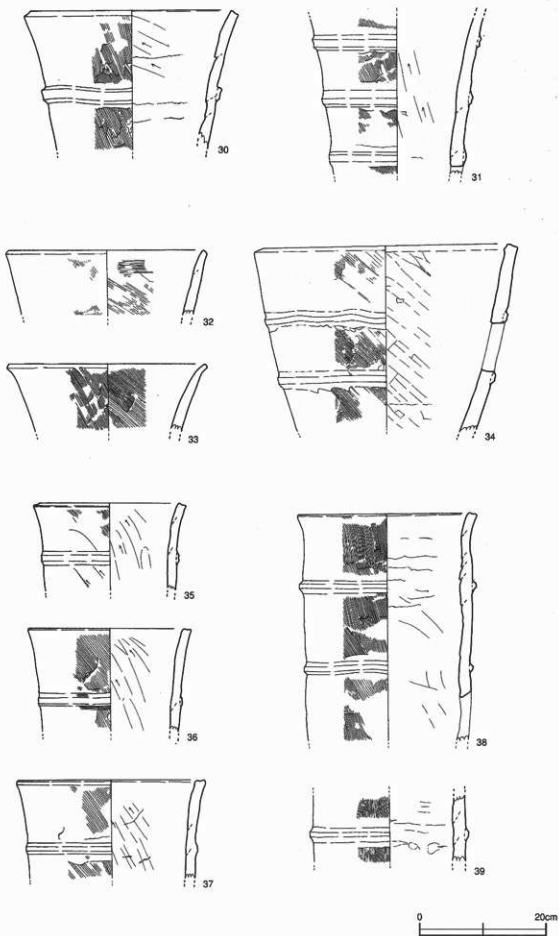
底部B-1類は64~67が該当し、接地面が平坦に仕上げられ、最下段突帯は接地面より8~10cmの位置にあるもの。

底部B-2類は68~71が該当し、接地面がやや丸みを帯びて仕上げられるものである。

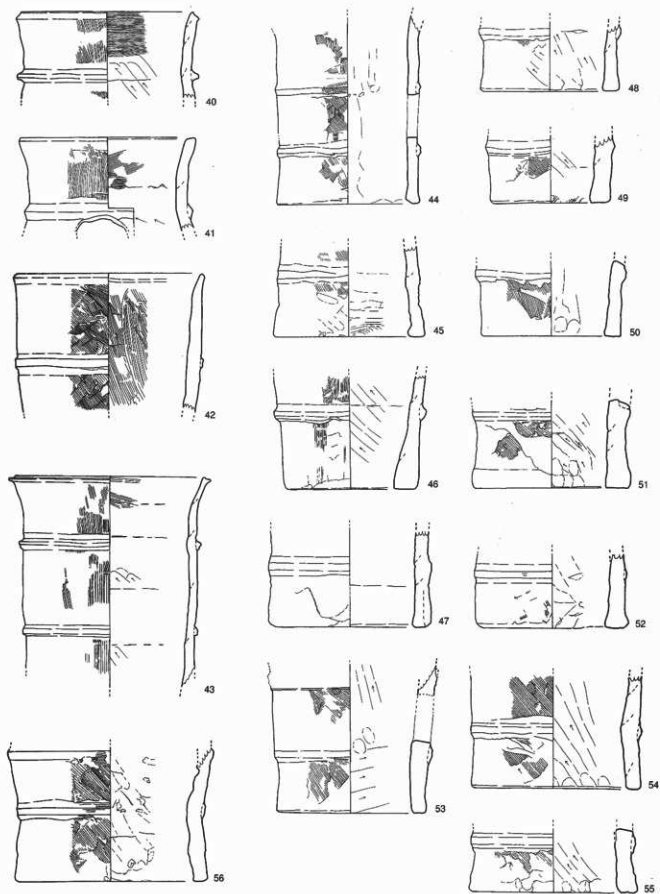
口縁A-2類と底部B-1類がセットとなる可能性がある。



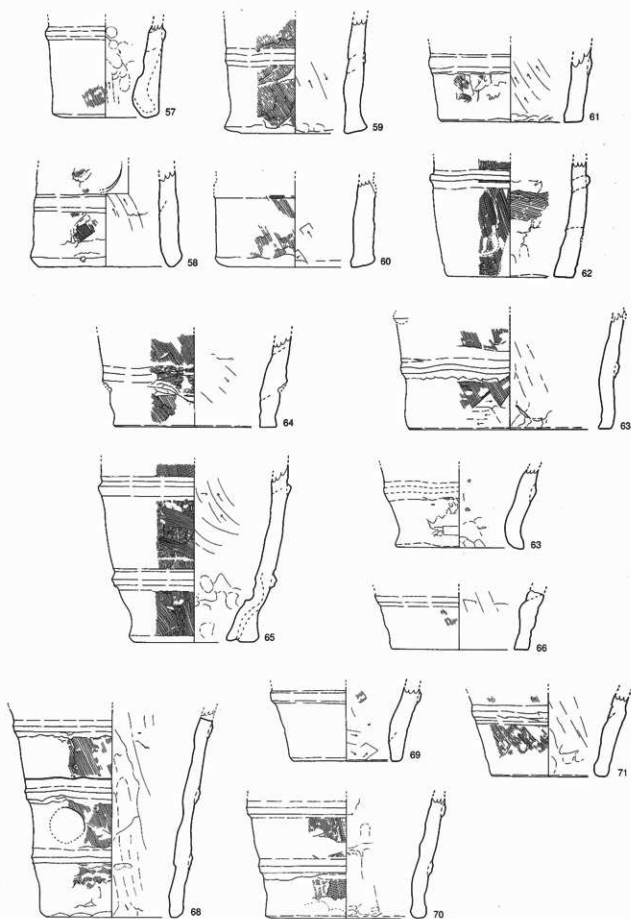
第43図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]



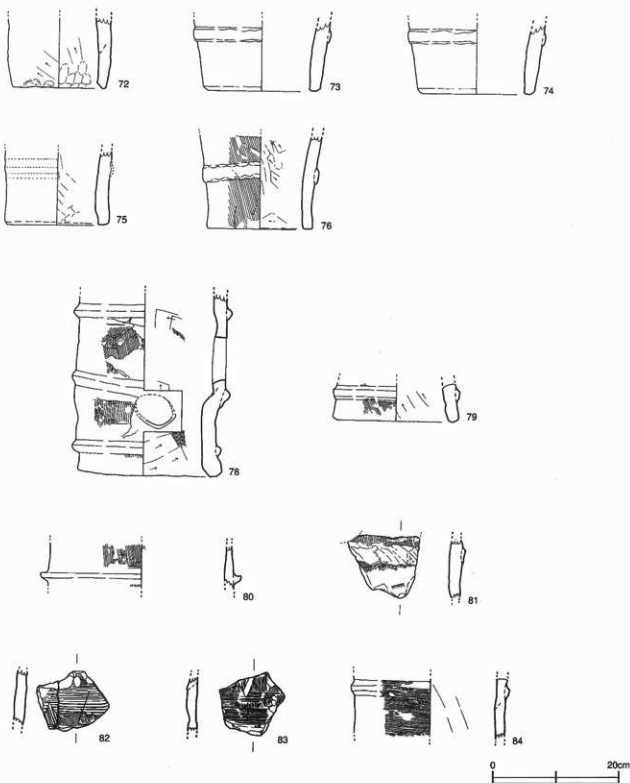
第44図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]



第45圖 丸山古墳 出土遺物実測圖 [1/6]



第46図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]



第47図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/6]

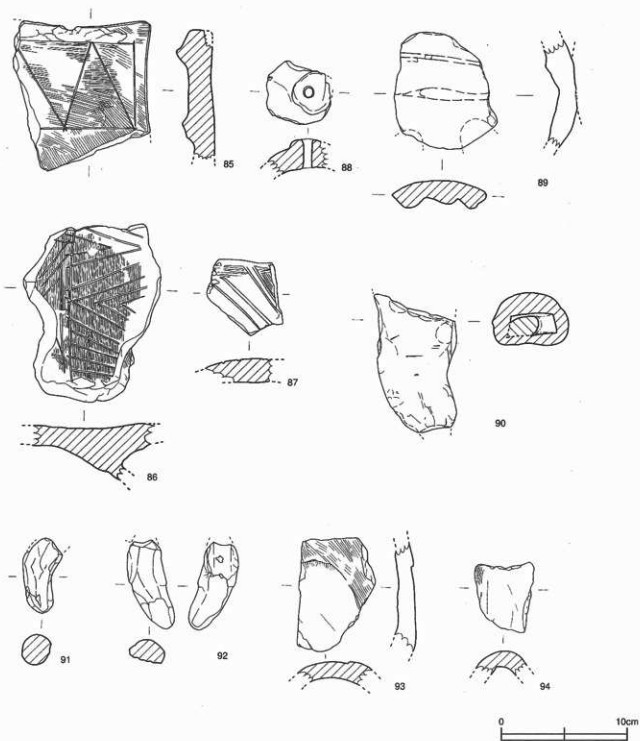
その他の円筒埴輪

80～84は円筒埴輪の破片で、80は突帯上面が低く窪む。81は押圧技法の最下段突帯か。82～84は、2次調整で横ハケが施されており、わずかに変則的なB種横ハケである。

形象埴輪

人物、動物？、器財（盾？・家形）、等があるが、大半は破片資料で、全体像が判明するものは無い。

85～87は盾形と思われるもので、ヘラ状工具で線刻を施す。88～90は人物の一部であろうか。88は人物の耳根元、89は巫女の前頭部分で、頂部には装飾品が乗せられていた痕跡が残る。90は人物の腕か。91、92は動物の尻尾、又は、人物の腕と考えられる。93、94は不明。95～97は家形埴輪

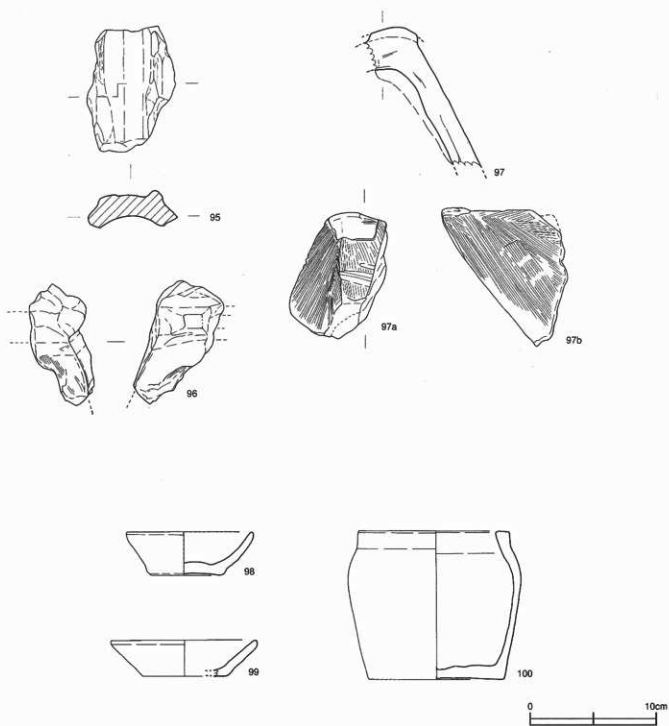


第48図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]

で、95は屋根、又は、壁の一部と思われる。96は屋根と壁の接点部分の破片で、右図の一部には、突帯が遺存している。97は屋根部分の破片で、妻側を示す。97-aは上からの俯瞰で、一部に鏝木の痕跡が残る。97-bは側面を示している。

その他の遺物

98、99は土師器の坏で、98は復原口径10.0cm、底径5.6cm、器高3.4cm。99は復原口径11.6cm、底径6.6cm、器高2.8cmを測る。100は7T出土の包衣壺で、近現代のものであろう。



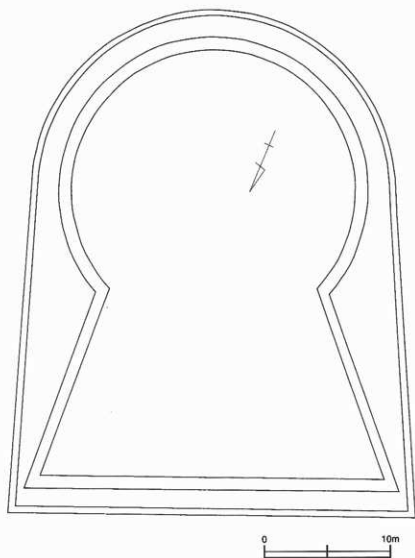
第49図 丸山古墳 出土遺物実測図 [1/3]

Ⅳ 小結

1) 釘崎1号古墳について

①墳丘規模

今回の調査は緊急措置的な確認に終始した事に加え、当初の予想をはるかに超えた開削が過去に行われて



第50図 釘崎1号古墳 推定復原図（遺存状況が良好でない為、2段目は図示していない。） [1/300]

いた為に、墳丘本体は相当なダメージを受けていた。小規模な調査であったが故に、墳丘企画等についての詳細については論及出来ない事は勿論であるが、今回の調査の成果に基づき、墳丘の規模等について、若干の記述を試みたい。

墳丘の築造過程や段築については、後世の開削や墳丘本体へのトレンチ設定回避により、現時点では不明確である。しかし、現地表面（以下、GL）から墳丘頂部までの比高差が2.5m、周溝底面との差が4.1mを測る事から、二段築成であった可能性が高い。葺石については、その存在は判然としない。先行すると考えられる岩戸山古墳や乗場古墳には認められるが、周溝内に丸礫の転石はあるものの、その絶対量は非常に少なく、釘崎1号古墳には葺石は無いものと考えたい。墳丘高については、開削や盛土流出、腐葉土の堆積等が予測され、数値は厳密性に欠けるものではあるが、後円部はGLより3.05m、周溝底面より4.9mを測る。前方部はGLより3.0m、周溝底面より5.6mを測る。後円部頂部はフラットで、前方部は後円部方向に頂部のレベルを徐々に減じている事から、各頂部周辺はあまり改変を受けていないと考えられる。

これまでの成果を整理すると、周溝検出面を基準とした釘崎1号古墳の推定規模は、全長40.0m、墳丘長36.0m、後円部径24.5m、前方部幅29.8m、くびれ部幅18.5mを測り、周溝は幅3.0mの盾形を示すものと推定される。

但し、今回の調査は、既述したように最小限度のトレンチ設定であった事もあり、又、調査区域の関係上、必ずしも全て満足のいくトレンチ設定ではなかった。よって以上の数値は今後の再確認調査において修正されるべきであり、将来数値が変動する可能性を含むものである。

②古墳の年代

今回の調査は、古墳の規模の把握が第一目的であった為、墳丘本体、及び、内部主体については調査を及ぼしていない。したがって、古墳の造営時期については明確な判断は出来ない。しかし、周溝内より出土した埴輪から、およそその時期判断は出来ると思われる。

出土した埴輪には、口縁端部の整形の粗雑化や突帯高の低下・偏平化、器面調整の粗雑化と横ハケの未確認、等が特徴として挙げられる。これらの点は、八女古墳群中では岩戸山古墳より後出し、最新段階の前方後円墳である鶴見山古墳より先行するものであり、また、第3トレンチ他出土の須恵器片とも考えあわせると、田辺福年のTK10~TK43型式の時期に当てはまるものと思われる。この時期に最も近い古墳として、乗場古墳と善蔵塚古墳（広川町）があるが、墳丘形態の差から、釘崎1号古墳がわずかに後出するものと考えられる。あえて実年代で表現すると、6世紀後半代でもやや古段階に位置していると理解する。

2) 丸山古墳について

①墳丘規模

今回の調査は、史跡内容の確認調査であった為、墳丘規模の確認に主眼を置き、トレンチの設定を行ったが、釘崎1号古墳同様、調査区域の制限から、一部数値が推定となっている。

丸山古墳は、耳縄山地から派生した広川丘陵より扇状地平野に向かい南に舌状に延びる低位丘陵南端上の頂部にある。北側背後にある広川丘陵本体とは、1つの浅い谷状地形を介している為、地形上の側面観は1つの独立した小山丘を呈している。この地形の特性により、後円部墳頂に立し前方部側を見渡すと、実際の比高差以上に大きな落差を感じる。

墳丘は二段築成であり、葦石を有している。しかし、後円部の調査(1T・7T)では葦石は確認出来なかった。墳丘高については、盛土流出や腐葉土の堆積、墳丘裾部の開削等により、その数値は変化していると思われるが、現状での墳高は、後円部が周溝検出面より5.1m、くびれ部が2.7m、前方部が4.8mを測る。表土除去後の墳丘1段目平坦面の標高は54.1m前後である。後円部墳頂はフラットで現標高59.3m、前方部からくびれ部にかけてはレベルを徐々に減じており、前方部標高57.8m、くびれ部標高57.2mを測り、前方部と後円部の比高差は1.5m、くびれ部との差は2.1mを測る。

墳丘測量図、及び、各トレンチの調査結果を整理すると、推定全長57.4m、推定墳丘長55.0m、後円部幅30.0m、推定前方部幅40.4m、推定くびれ部幅23.4mを測る。墳丘長から見た後円部径と前方部長との比率は現状で4:3程で、前方部幅も後円部径に対し10.4mも広く、平面形では、どっしりと安定感のある形が想定出来る。周溝については、不確定な要素が多く、その形態については不明であると言わざるを得ない。又、古墳周囲を完周するか否かについても、現時点では判断としない。

今回提示した想定平面形は、限られた範囲内での数値を基準にしており、将来変動・変更の可能性は十分にある事をおこわりしておく。

②須恵器と古墳の年代

今回の調査では、後円部周溝内やくびれ部で須恵器が出土したが、特に西側くびれ部にあたる2番トレンチの1段目平坦面に該当する部分から、非常に遺存状態の優れた須恵器群が一括的に出土した。ここでは2番トレンチ出土の須恵器群に対し、若干の検討を加えた上で、古墳の築造年代について考えてみたい。

出土した須恵器群には高坏形器台、高坏、小型甕、中型甕、大甕がある。器面に施文された文様で2群に分けられる。1つはヘラ描波状文の1群で、これをA群とする。もう1つは櫛描波状文の1群で、これをB群とする。B群はA群を境に北側のB-1群、南側のB-2群とした。A群は器台1、小型甕1があり、B-1群は器台1、無蓋高坏1、(土師器甕1)をもつ。B-2群は器台1、短脚無蓋高坏1、小型甕1、をもつ。中型甕と大甕はB-2群の背後に位置する。

各群に共通する要素として、①異種施文された器物は単一群中には持たない。②器台と小型甕が1セットとなる。③全てほぼ真東を向き列を成す。等が見られる。特に③については、当該位置は墳丘葦石が途切れ、レベルが急に降下し、埋土も非常に堅緻になっている事から、主体部の前庭部、又は、これに非常に接近している箇所と思われる、この3群の須恵器は墓前祭祀に伴う土器群のものと思われ、セット関係や祭祀行為の一部が復原出来る資料として貴重である。

さて、次にこれら須恵器群の時期についてであるが、A群にある器台は坏部も深く、脚部が端部付近で内側に屈曲する点は、やや古相を示すが、坏部や脚部の凸線は鈍く、口縁端部のつまみ上げも鋭さを欠く。B群の器台についてもほぼ同様であるが、波状文は丁寧に施され、凸線もやや鋭い。坏部に関しては、B-1器台は深めだが、B-2器台は浅い。高坏も器台同様、各個体に若干の差が出てきている。B-2群の高坏は短脚部が「ハ」の字に開き、外端部に段がくなど古相を示すが、段が鈍く、シャープさを欠く。B-1群の高坏は、口縁端部や坏部凸線などはシャープさを残し、透孔も丁寧に面取りされるなど古い要素を持つが、脚部の長脚化等、新出の要素も強く見られる。A・B群の甕類も同様に、短部や沈線の鋭さにやや欠ける感が

ある。

八女古墳群内には比較する資料が少ないが、5世紀後半に比定されている筑後市・欠塚古墳（註1）出土の器台脚部片や有蓋高坏脚部片と比較すると、凸線や端部の作りが比較的丁寧であり、丸山古墳出土須恵器より、若干先行すると思われる。八女市の立山山古墳群8号墳（註2）出土資料の観察では、資料中の甕に八女古窯跡群の中尾谷窯跡資料に類似するものがあり、八女古窯跡群資料との類似が見られない丸山古墳出土資料は、8号墳出土資料に対し先行するものと考えられる。立山山古墳群8号墳は、報告によると6世紀前半頃に比定されている。

八女古墳群内で当該時期に近い古墳として、岩戸山古墳がある。岩戸山古墳についての詳細については、数多くの先学の論考があるので割愛させていただくが、本古墳出土埴輪の様相をみる限り、二次調整として横ハケが施された資料が見当たらない等、丸山古墳が若干ながらも先行する要素がある。岩戸山古墳出土須恵器がMT15～TK10型式に相当するとされており、丸山古墳の須恵器群はTK47～MT15型式に相当するものと思われる。ここで、あえて丸山古墳の実年代を示すとすれば、5世紀末葉～6世紀前半代が考えられ、丸山古墳の築造年代も、この時期内に収まるものと考えたい。

（註1）佐田 茂1993「欠塚古墳」筑後市文化財調査報告書第8集

（註2）佐田 茂、伊崎俊秋1983「立山山古墳群」八女市文化財調査報告書第10集

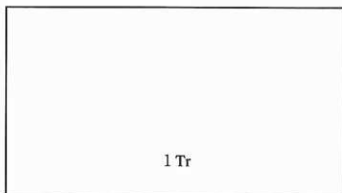


丸山古墳 2番トレンチ出土須恵器群 配置復原状況（くびれ部上面より）

PLATES

凡 例

出土遺物に関するPL中央の記載は、以下の要領となっている。



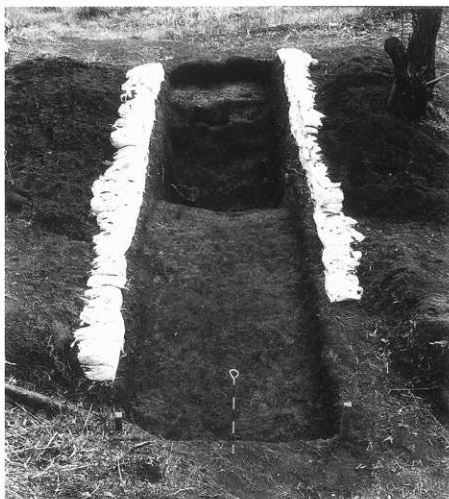
(数字は、出土地点のトレンチナンバーを示す。)



1 釘崎1号・2号・4号古墳遠景 (南西より)



2 釘崎1号古墳全景 (上空より)



1 釘崎1号古墳 1番トレンチ (北より)



2 釘崎1号古墳 1番トレンチ (南より)



1 釘崎1号古墳 1番トレンチ東壁土層



2 釘崎1号古墳 2番トレンチ (西より)



1 釘崎1号古墳 2番トレンチ (東より)



2 釘崎1号古墳 2番トレンチ内転石状況



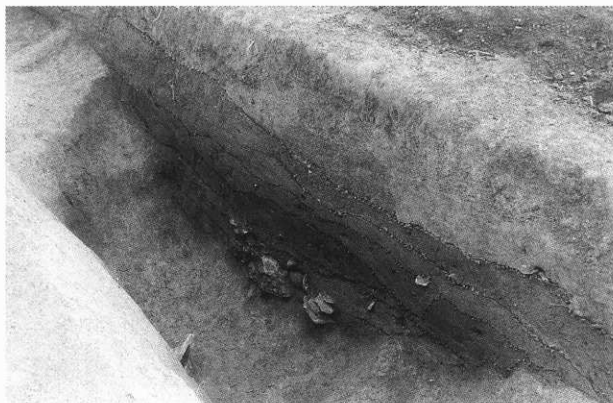
1 釘崎1号古墳 3番トレンチ (北西より)



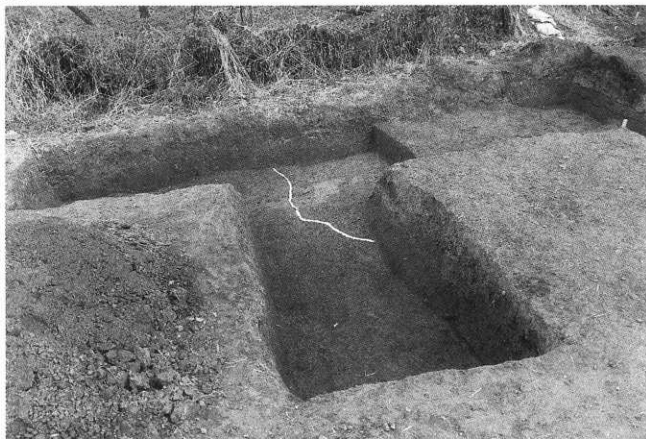
2 釘崎1号古墳 3番トレンチ 墳丘よりくびれ部



1 釘崎1号古墳 4番トレンチ (北東より)



2 釘崎1号古墳 4番トレンチ 南壁土層



1 釘崎1号古墳 5番トレンチ (西より)



2 釘崎1号古墳 5番トレンチより前方部を望む



1 丸山古墳 全景 (西側上空より)



2 丸山古墳 全景 (北西より)



1 丸山古墳 1番トレンチ (南西より)



2 丸山古墳 1番トレンチ 後円部土層断面



1 丸山古墳 2 番トレンチ (南西より)



2 丸山古墳 2 番トレンチ 須恵器群出土状況



1 丸山古墳 2 番トレンチ葦石検出状況 (南東より)



2 丸山古墳 3 番トレンチ拡張部b (南より)



1 丸山古墳 3番トレンチ拡張部b東壁土層断面 (南より)



2 丸山古墳 4番トレンチ (北西より)



1 丸山古墳 5 番トレンチ葺石検出状況 (北より)



2 丸山古墳 5 番トレンチ葺石検出状況 (北東より)



1 丸山古墳 6番トレンチ墓石検出状況 (南東より)



2 丸山古墳 前方部よりくびれ部を望む (北より)



1 丸山古墳 6番トレンチくびれ部周辺状況 (北東より)



2 丸山古墳 7番トレンチ (北東より)



釘崎1号 表探遺物



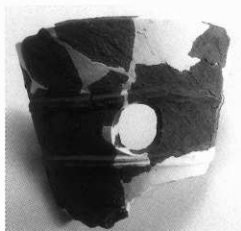
釘崎1号 表探遺物



釘崎1号 4Tr



釘崎1号 表探遺物



丸山 7Tr



丸山 2Tr



丸山 1Tr



丸山 6Tr



丸山 2Tr



丸山 2Tr



丸山 2Tr



丸山 2Tr



丸山 2Tr



丸山 2Tr

報告書抄録

ふりがな	くぎさき1ごうこふん まるやまこふん							
書名	釘崎1号古墳・丸山古墳発掘調査報告書							
副書名	福岡県八女市大字豊福・本所在古墳の調査報告書							
巻次	第1分冊							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 69 集							
編著者名	大塚恵治							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町6 4 7 TEL 0943-23-1982							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
くぎさき1ごうこふん 釘崎1号古墳	福岡県 八女市大字豊福 字釘崎山	402109		33°13'43"	130°34'34"	20001211 ～20010220	釘崎1号古墳 70㎡ (トレンチ部)	重要遺跡 確認調査
まるやまこふん 丸山古墳	大字本 字蓮池			33°13'18"	130°35'36"	20020201 ～20020611	丸山古墳 193㎡ (トレンチ部)	史跡内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
釘崎1号古墳	古墳	古墳時代 (5世紀末 ～6世紀後半)	古墳、土塼、ピット 溝		須恵器 埴輪 (円筒、朝顔、形象)		丸山古墳での墓前 祭祠に供した須恵器 群の出土	
丸山古墳								

釘崎1号古墳・丸山古墳

八女市文化財調査報告書

第69集

平成15年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647

印刷 橋爪印刷
八女市大字吉田1899-1